

Historical Site OMURO Tumuli Cluster

国史跡 大室古墳群

史跡整備事業にともなう遺構確認調査概要報告書(2)

— エントランスゾーンA・E区 遺構編 —



March, 2008

2008（平成20）年3月

NAGANO City & NAGANO City Board of Education

長野市・長野市教育委員会

Historical Site OMURO Tumuli Cluster

国史跡 大室古墳群

史跡整備事業にともなう遺構確認調査概要報告書(2)

— エントランスゾーンA・E区 遺構編 —

March, 2008

2008 (平成20) 年 3 月

NAGANO City & NAGANO City Board of Education

長野市・長野市教育委員会



244号墳全景（南西から）

序

大室古墳群は、長野県長野市松代町大室に所在する、5世紀前半から8世紀にかけて築造された大規模な古墳群です。奇妙山から派生する3つの支脈尾根上と、それにはさまれた2つの谷部に立地し、約2.5km平方という限られた範囲に約500基もの古墳が密集して分布しています。

この古墳群には、土を盛る代わりに石を積みあげた「積石塚」や、石棺や石室の天井石を三角屋根形に架構した「合掌形石室」が多く存在しており、全国的にも他に例をみない貴重な古墳群であるとして、平成9（1997）年7月28日に古墳群の一部約16haが国史跡に指定されました。

大室古墳群は、これら積石塚や合掌形石室の存在により、古くから学術的に著名な古墳群でしたが、それに対して一般市民の認知度は決して高いといえませんでした。その理由としては、盗掘や崩落・風化・草木の繁茂などにより、古墳群をとりまく環境が本来の姿を失っていることが第一に挙げられます。さらに、現地における公開施設を含む情報の希薄さ、交通アクセスの不便さ、便益施設の不足なども挙げられましょう。

そこで長野市では、古墳群の詳細な研究調査を実施し、その成果に基づいた保存修理を図ると共に、周辺部の情報提供施設や便益施設の建設など、歴史的背景を体感できる史跡公園として整備し、広く公開・活用することを目的として、史跡指定地の公有化と史跡整備事業に着手いたしました。

本書は、史跡整備事業の適切な遂行に必要な古墳群の諸情報を得るために実施した、エントランスゾーンにおける古墳範囲確認調査の概要報告書であります。本書に所収されている諸情報に基づき、文化庁および長野県教育委員会のご指導を仰ぎながら、史跡整備事業を進めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが当市の文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに確認調査実施に際して多大なご尽力を賜りました、文化庁ならびに長野県教育委員会の皆様、史跡大室古墳群整備委員会の先生方、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、またご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2008（平成20）年3月

長野市長 鷺澤正一

例 言

1 本書は、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金および長野県の文化財保護事業補助金を受けて実施した、史跡大室古墳群保存整備事業にともなう遺構確認調査の概要報告書である。

2 調査地は、長野県長野市松代町大室 254 番地 3 ほかに所在する。

3 現場における遺構確認調査は、文化庁および長野県教育委員会、ならびに史跡大室古墳群整備委員会の指導を得て、長野市教育委員会が 1998 ～ 2006（平成 10 ～ 18）年度に実施した。

4 本書の編集は、長野市教育委員会文化財課専門員清水竜太が担当し、執筆分担は下記のとおりである。なお、第Ⅱ章調査成果における各古墳の記述に関しては、各年度末にまとめられた時信武史氏の報告を基本とし、適宜加除修正を加えたものである。

飯島哲也 第Ⅰ章

清水竜太 第Ⅱ章

5 遺構確認調査の実施および本書の編集に際し、下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し、明記するものである。（2007 年度現在、敬称略）

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 小野 健吉

長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課 指導主事 西山 克己

史跡大室古墳群整備委員会 委員長 小林 秀夫（学識経験者）

同 職務代理者 佐々木憲一（明治大学文学部准教授）

同 委員 大塚 初重（明治大学名誉教授）

同 同 岩崎 卓也（古代オリエント博物館長、松戸市立博物館長）

同 同 佐々木邦博（信州大学農学部教授）

同 同 笹澤 浩（長野市地方文化財保護審議会会長）

同 特別委員 須田 和雄（大室古墳群保存会会長）

坂城町教育委員会 生涯学習課文化財係 学芸員 時信武史

6 調査によって得られた諸資料は、ガイダンス施設「大室古墳館」にて保管している。

凡 例

本書では、遺構確認調査によって得られた諸情報のうち、特に遺構に関する基礎的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 調査は、史跡入口部分(エントランスゾーン)に所在する24基の古墳、26～29号墳・31～33号墳・235号墳・237～247号墳・A～D号墳・ハ号墳の、墳丘範囲の確認と、改変状況の把握など、整備に必要な諸情報を得ることを目的として実施した。

本書ではこのうち、2006(平成18)年度に刊行したB～D区を除く、A区(243・244号墳)とE区(31～33号墳)に位置する5基について、その概要を報告するものである。

- 2 古墳の名称は栗林紀道氏の分布調査を基に長野市教育委員会が命名したものを使用した。またA号墳とB号墳は明治大学の調査により発見された古墳で、それぞれ従来26A号墳、26B号墳と呼称されていたものである。またC号墳とD号墳は史跡整備にともなう長野市教育委員会の調査で発見された古墳で、それぞれ従来26C号墳、?号墳と呼称されていたものである。

- 3 本書には、範囲確認調査において確認したエントランスゾーンA・E区におけるすべての遺構について掲載し、出土遺物については2012(平成24)年度末刊行予定の整備報告書にまとめて掲載する。

- 4 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。調査地における座標北からの真北方向角は約 $0^{\circ}9'41''$ であり、また磁北は真北より西へ約 $6^{\circ}40'$ の偏差がある。

- 5 基準点測量および墳丘トレンチの遺構測量は、平面直角座標系(国家座標)の第Ⅷ系(東経 $138^{\circ}30'00''$ 、北緯 $36^{\circ}00'00''$)の座標値と日本水準原点の標高を基準としている。墳丘測量および遺構測量の一部は、株式会社フジテックに委託して行った。

- 6 各トレンチの遺構測量は、基準点測量を基に開放トラバースを設定し、現場にて調査員・調査補助員により1/10ないしは1/20の縮尺で基本原図を作成した。

本書にて掲載している縮尺は基本的に、墳丘測量図1/150、調査成果図1/150、トレンチ個別図1/60として統一してある。

- 7 本書で用いる古墳に関する用語のうち、特に左右の表現については、石室の奥壁を背にして入口を向いた表現を基本としている。

また、「積石塚」および「合掌形石室」等の、現在までに学術的な用語規定に関する定義付けが行われていない用語については、本書ではこれまでどおり慣例的な使用にとどめるものとする。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

| | |
|-------------------------|----|
| 第 I 章 史跡整備事業の概要 | 1 |
| 第 1 節 大室古墳群の位置と概要 | 1 |
| 第 2 節 史跡整備事業の経緯 | 4 |
| 第 3 節 事業の体制 | 5 |
| 第 II 章 調査成果 | 9 |
| 第 1 節 調査概要 | 9 |
| 第 2 節 31 号墳 | 13 |
| 第 3 節 32 号墳 | 16 |
| 第 4 節 33 号墳 | 19 |
| 第 5 節 243 号墳 | 22 |
| 第 6 節 244 号墳 | 34 |

写真図版

報告書抄録

奥 付

付 図

第 I 章 史跡整備事業の概要

第 1 節 大室古墳群の位置と概要

大室古墳群は、長野市南部の松代町大室に所在する、古墳時代の 5 世紀前半から 8 世紀にかけて築造された総数約 500 基の古墳群である。奇妙山から派生する 3 つの支脈尾根上とそれにはさまれた 2 つの谷部に立地し、約 2.5km 平方の範囲に密集して分布している。古墳の分布状態とその地形条件などから大小 5 つの支群に大別され、うち大室谷支群の一部が 1997（平成 9）年に国史跡に指定された。

北山支群は、大星山の尾根上を中心として 22 基の古墳により構成される。山頂近くに位置する 18 号墳は大室古墳群唯一の前方後円墳（全長 56 m）である。

大室谷支群は、大星山の支脈と中央支脈とにはさまれた谷部に分布し、古墳数 241 基を数える。古墳の分布範囲は谷入口の標高 360 m から最深部の 660 m 地点までの総延長 2km に達し、著しく細長い帯状の分布を示している。明治大学による継続的な学術調査が実施されてきた地区であり、国史跡に指定された。

霞城支群は、中央支脈の先端部尾根上に分布する。大室集落を眼下に見る位置にあり、16 基の古墳により構成されている。なお分布範囲に重複して中世段階に霞城が構築されたため一部の地形の改変がみられる。

北谷支群は、中央支脈と、尼巖山の支脈である金井山（標高 495 m）とにはさまれた谷部に位置し、古墳総数 208 基を数える。支群内はさらに、谷裾の緩斜面と上部の 4 支谷に立地条件が細分される。なお県農業大学校建設によって 1969（昭和 44）年に緊急発掘調査が実施されている。

金井山支群は、金井山の尾根上を中心として分布する。鳥打峠周辺を含めて 18 基の古墳により構成されている。なお尾根裾部は柴石の採石場により地形は改変されている。

■ 史跡大室古墳群の概要

| | |
|-------|--|
| 名 称 | 史跡大室古墳群 |
| 所 在 地 | 長野市松代町大室 254-3 番地ほか 計 367 筆 |
| 指定種別 | 国指定史跡 |
| 指 定 日 | 1997（平成 9）年 7 月 28 日（文部省告示第 140 号、官報第 2188 号） |
| 指定面積 | 163,043m ² |
| 古 墳 数 | 総数 166 基（積石塚 118 基・合掌形石室 7 基、史跡指定範囲内） |
| 時 代 | 古墳時代（5～7 世紀） |
| 特 徴 | (1) 約 500 基の古墳が、谷あいなどの狭い範囲に密集していること。 (2) 積石塚が古墳群内の多くを占めていること。 (3) 合掌形石室という特異な埋葬施設が存在すること。 (4) 馬匹生産や古代大室牧との関連性が考えられること。 (5) 渡来系集団との関連性が考えられること。 |



図1 調査区位置図 (1/100,000)

第2節 史跡整備事業の経緯

長野市では、1997（平成9）年7月28日に国史跡指定を受け、即座に史跡整備事業に着手している。まずは用地取得事業として、文化庁の史跡等買上げ事業による補助を受けながら、1997（平成9）年度から2002（平成14）年度までに154,220㎡の用地取得を完了した。

史跡整備事業の指針となる『大室古墳群史跡整備基本計画』は、1999（平成11）年3月に策定した。この基本計画に基づき、第I期事業としてエントランスゾーンと施設整備ゾーンから着手している。

施設整備ゾーンでは、地域総合整備事業債ふるさとづくり事業を援用し、ガイダンス施設である大室古墳館（平屋250㎡）を、2002（平成14）年7月7日に開館させた。大室古墳館には博物館的な機能は付加せず、あくまで大室古墳群全体が野外博物館であるとの基本方針に基づき、古墳見学の手助けとなる事前情報の提供を主目的としている。入館者数は、2002（平成14）年度は4,865人、2003（平成15）年度3,669人、2004（平成16）年度3,548人、2005（平成17）年度2,756人、2006（平成18）年度2,608人、2007（平成19）年度2,628人となっており、近隣小学校の遠足地としても利用されている。

エントランスゾーンについては、2001（平成13）年3月に『史跡大室古墳群エントランスゾーン保存整備基本設計書』を作成した。この基本計画に基づき、2000（平成12）年度までに区域内の古墳に関する予備調査を終了し、また並行して進められた各古墳の範囲を確認するための試掘調査や発掘調査は、2006（平成18）年度まで継続実施している。この調査結果を基に、個別古墳の保存修理工事にも着手し、2004（平成16）年度に246号墳、2006（平成18）年度から翌年度にかけて235号墳を修理し、2008（平成20）年度からは、複数基の古墳を修理しながら、同時に各種環境整備工事に着手し、2011（平成23）年度までの予定で、エントランスゾーン全体の整備を進めていく予定である。

■ 史跡大室古墳群保存整備事業の経緯と予定（2008年3月現在）

| | |
|--------|--|
| 平成9年度 | 国史跡指定、史跡等買上げ事業開始。 |
| 平成10年度 | 史跡整備基本計画策定。遺構確認調査（予備調査・試掘調査）開始。 |
| 平成11年度 | 先行取得による公有地化開始。施設整備ゾーン工事着手。 |
| 平成12年度 | ガイダンス施設「大室古墳館」建設工事着手。 |
| 平成13年度 | エントランスゾーン整備基本計画策定。遺構確認調査（発掘調査）開始。 |
| 平成14年度 | ガイダンス施設「大室古墳館」開館。 |
| 平成15年度 | 石室実測調査の実施。 |
| 平成16年度 | 246号墳保存修理工事。音無川の氾濫。 |
| 平成17年度 | 園内排水路改修工事。 |
| 平成18年度 | 235号墳保存修理工事開始。遺構確認調査終了。B～D区調査概報作成。 |
| 平成19年度 | 地形復元工事、235号墳保存修理工事。A・E区調査概報作成。 |
| 平成20年度 | 地形復元工事、C3区古墳保存修理工事、D区環境整備工事。 |
| 平成21年度 | A・C2区古墳保存修理工事、D区環境整備工事。 |
| 平成22年度 | A・C1区古墳保存修理工事、C区環境整備工事。復元整備ゾーン基礎調査開始。 |
| 平成23年度 | E区古墳修理工事、A・B・E区環境整備工事。復元整備ゾーン基本計画策定。 |
| 平成24年度 | エントランスゾーン公開。史跡整備報告書作成。復元整備ゾーン遺構確認調査開始。 |

第3節 事業の体制

長野市では、1997（平成9）年度から着手した史跡整備事業に対し、専門的な見地から適切かつ有効な指導・助言を得るため、同年6月17日に史跡大室古墳群整備委員会を設置している。設置当初から委員長として就任していただいた明治大学文学部教授小林三郎氏が2006（平成18）年11月5日にご逝去されたが、後任の委員長には小林秀夫氏が委員各氏の互選により就任し、古墳調査部会員であった佐々木憲一氏を新たに委員として委嘱している。また、地元の意見や要望を聴取するため特別委員を設置しているが、2004（平成16）年度からは大室古墳群保存会の会長に就任を依頼している。さらに必要に応じて専門部会を設置しており、これまでに古墳調査部会、環境調査部会が設置された。

整備委員会はこれまでに11回開催しており、整備基本計画の策定から個々の古墳調査の考古学的知見、および整備工事の詳細に至るまで指導を受けている。

また史跡整備事業の事務局は、長野市教育委員会文化財課が担当している。

| | |
|---------------------|------------------------------|
| 史跡大室古墳群整備委員会 | 2007（平成19）年度現在 |
| 委員長 | 小林 秀 夫（学識経験者） |
| 職務代理者 | 佐々木 憲 一（明治大学文学部准教授） |
| 委員 | 大塚 初 重（明治大学名誉教授） |
| 同 | 岩崎 卓 也（古代オリエント博物館長・松戸市立博物館長） |
| 同 | 佐々木 邦 博（信州大学農学部教授） |
| 同 | 笹 澤 浩（長野市地方文化財保護審議会会長） |
| 特別委員 | 須 田 和 雄（大室古墳群保存会会長） |



2006（平成18）年度整備委員会



2007（平成19）年度整備委員会

| | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 | 第6回 | 第7回 | 第8回 | 第9回 | 第10回 | 第11回 |
|-------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| 年 度 | 1997年度 平成9年度 | 1997年度 平成9年度 | 1998年度 平成10年度 | 1999年度 平成11年度 | 2000年度 平成12年度 | 2001年度 平成13年度 | 2002年度 平成14年度 | 2004年度 平成16年度 | 2005年度 平成17年度 | 2006年度 平成18年度 | 2007年度 平成19年度 |
| 開 催 日 | 6月17日 | 11月28日 | 7月10日 | 7月27日 | 7月21日 | 8月23日 | 10月17日 | 8月31日 | 12月2日 | 9月22日 | 2月28日 |
| 会 場 | 長野市役所 | 長野市役所 | サンホールマツシロ | サンホールマツシロ | サンホールマツシロ | 長野市役所 | 長野市役所 | 永保荘 | 長野第一ホテル | 長野第一ホテル | 長野市役所 |
| 指 導 (担当) | 文化庁文化財保護部記念物課 | | | | | | | | | | |
| | 文化庁文化財部記念物課 | | | | | | | | | | |
| | 長野県教育委員会 | | | | | | | | | | |
| | 史跡大室古墳群整備委員会 | | | | | | | | | | |
| 委員長 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林三郎 | 小林秀夫 |
| 職務代理者 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 大塚初重 | 佐々木憲一 |
| 委 員 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 岩崎卓也 | 大塚初重 |
| 委 員 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 佐々木邦博 | 岩崎卓也 |
| 委 員 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 笹澤 浩 | 佐々木邦博 |
| 委 員 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 小林秀夫 | 笹澤 浩 |
| 特別委員 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 中村 功 | 神戶直日 | 須田和雄 |
| | 特別参加 | | | | | | | | | | |
| | | | | | 北村 保 | | 神戶直日 | | | | |
| | | | | | | | 梅崎 武 | | | | |
| 専門部会 | 古墳調査部会 | | | | | | | | | | |
| 部会長 | | | 小林三郎 |
| 部 員 | | | 新井 悟 | 新井 悟 | 佐々木憲一 |
| 部 員 | | | | | 古屋紀之 | 新井 悟 | 新井 悟 | 新井 悟 | | | |
| 部 員 | | | | | 伝田郁夫 | 古屋紀之 | | 古屋紀之 | | | |
| 部 員 | | | | | 時信武史 | | | | | | |
| 専門部会 | 環境調査部会 | | | | | | | | | | |
| 部会長 | | 佐々木邦博 | | 佐々木邦博 | | | | | | | |
| 部 員 | | 平岡直樹 | | 中堀謙二 | | | | | | | |
| 部 員 | | 内田隆之 | | | | | | | | | |
| 部 員 | | 田中裕二 | | | | | | | | | |

表1 史跡大室古墳群整備委員会の経緯

| | 1997年度 平成9年度 | 1998年度 平成10年度 | 1999年度 平成11年度 | 2000年度 平成12年度 | 2001年度 平成13年度 | 2002年度 平成14年度 | 2003年度 平成15年度 | 2004年度 平成16年度 | 2005年度 平成17年度 | 2006年度 平成18年度 | 2007年度 平成19年度 |
|-----------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| 市長 | 塚田 佐 | 鷺澤正一 | 鷺澤正一 | 鷺澤正一 | 鷺澤正一 | 鷺澤 正一 | 鷺澤 正一 |
| 助役・副市長 | 山岸 勲 久保田隆次 | 市川 衛 久保田隆次 | 市川 衛 久保田隆次 | 市川 衛 久保田隆次 | 市川 衛 久保田隆次 | 市川 衛 | 市川 衛 | 市川 衛 | 市川 衛 | 酒井 登 | 酒井 登 |
| 収入役・会計管理者 | 徳永治雄 | 徳永治雄 | 徳永治雄 | 徳永治雄 | 伊藤克昭 | 伊藤克昭 | 伊藤克昭 | 伊藤克昭 | 伊藤克昭 | 伊藤克昭 | 中澤潤一 |
| 委員長 | 新井好仁 | 新井好仁 | 新井好仁 | 新井好仁 | 新井好仁 | 久保 健 | 小泉敬治 |
| 委員 | 河原悠二 松浦節子 井田寛行 | 河原悠二 松浦節子 柳澤幸一 | 河原悠二 松浦節子 柳澤幸一 | 河原悠二 松浦節子 柳澤幸一 | 柳澤幸一 野口 修 金物佳子 | 金物佳子 中島実香 夏目 潔 |
| 教育長 | 滝澤忠男 久保 健 | 滝澤忠男 久保 健 | 滝澤忠男 久保 健 | 滝澤忠男 久保 健 | 久保 健 | 立岩睦秀 | 立岩睦秀 | 立岩睦秀 | 立岩睦秀 | 立岩睦秀 | 立岩睦秀 |
| 教育次長 | 早水清美 窪田雅武 | 早水清美 窪田雅武 | 今井克義 窪田雅武 | 今井克義 小池公雄 | 今井克義 小池公雄 | 小池公雄 小池睦雄 | 小池睦雄 小泉敬治 | 島田政行 小泉敬治 | 島田政行 玉川隆雄 | 島田政行 玉川隆雄 | 島田政行 玉川隆雄 |
| 課長 | 片岡久晴 | 宮澤 博 | 宮澤 博 | 滝澤仁恵 | 小林伯子 | 小林伯子 | 滝澤一郎 | 滝澤一郎 | 北村真一郎 | 北村真一郎 | 雨宮一雄 |
| 主幹 | 宮本幸明 | 宮澤 博 | 宮澤 博 | | | | | | | | |
| 課長補佐 | 宮本幸明 | 近藤 守 | 近藤 守 | 上原邦男 | 宮下春夫 | 宮下春夫 | 宮下春夫 | 山崎幸孝 | 山崎幸孝 | 山口 明 | 山口 明 |
| 係長 | 近藤 守 | 近藤 守 | 青木和明 | 青木和明 | 青木和明 | 青木和明 | 青木和明 | 千野 浩 | 千野 浩 | 千野 浩 | 千野 浩 |
| 係・担当 | 青木和明 | 青木和明 | 前島 卓 | 飯田 茂 | 飯田 茂 | 飯田 茂 | 飯田 茂 | 久保田泰 | 飯高哲也 | 飯高哲也 | 飯高哲也 |
| 〃 | 前島 卓 | 前島 卓 | 前島 卓 | 前島 卓 | 小出 明 | 小出 明 | 池田 匠 | 宿野隆史 | 久保田泰 | 石坂公人 | 石坂公人 |
| 〃 | 河野聡子 | 吉岡亜記 | 中村大輔 | 中村大輔 | 池田 匠 | 池田 匠 | 宿野隆史 | 篠原靖志 | 篠原靖志 | 篠原靖志 | 篠原靖志 |
| 〃 | 中村大輔 | 中村大輔 | 宿野隆史 | 吉岡亜記 | 吉岡亜記 | 宿野隆史 | 平林身和子 | 平林身和子 | 平林身和子 | 平林身和子 | 平林身和子 |
| 専門員(嘱託) | 宿野隆史 | 宿野隆史 | 勝田智紀 | 春名理史 | 宿野隆史 | 小林育英 | 小林育英 | 小林育英 | 時信武史 | 海野 修 | 海野 修 |
| 〃 | | | | | 時信武史 | 時信武史 | 時信武史 | 時信武史 | 海野 修 | 清水竜太 | 清水竜太 |
| 部長 | 宮原政嘉 | 宮原政嘉 | 白澤健太郎 | 白澤健太郎 | 白澤健太郎 | 酒井利治 | 酒井利治 | 中村治雄 | 中村治雄 | 中村治雄 | 伝田耕一 |
| 課長 | 酒井利治 | 酒井利治 | 鈴木康夫 | 鈴木康夫 | 伝田耕一 | 伝田耕一 | 伝田耕一 | 高見澤裕史 | 高見澤裕史 | 高見澤裕史 | 原田広己 |
| 担当(兼任職員) | 田原章文 | 田原章文 | 田原章文 | 田原章文 | 駒村哲一 | 駒村哲一 | 丸山信幸 | 平澤 智 | 平澤 智 | 西山 猛 | 平澤 智 |
| 〃 | | | | | 丸山信幸 | 丸山信幸 | 丸山信幸 | 西山 猛 | 西山 猛 | 西山 猛 | 緑川秀哉 |
| 部長 | 西沢清一 | 西山治雄 | 西山治雄 | 太田志郎 | 新保哲二 | 中山一雄 | 中山一雄 | 中山一雄 | 中山一雄 | 和田 智 | 和田 智 |
| 課長 | 溝口孟俊 | 山本員也 | 中村 信 | 小島竹一 | 小島竹一 | 栗原健爾 | 栗原健爾 | 栗原健爾 | 栗原健爾 | 永井敦司 | 返町洋三 |
| 担当(兼任職員) | | | | | 内山卓太郎 | 内山卓太郎 | 内山卓太郎 | 内山卓太郎 | 小林竜太 | 小林竜太 | 滝澤秀人 |

表2 事務局体制の経緯



図3 エントランスゾーン古墳分布図 (1/2,000)

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査概要

史跡大室古墳群においては、史跡指定を受けた翌年の1998（平成10）年度に策定した整備基本計画に基づき、史跡指定地の保存と活用をめざす整備事業を推進するために、同年度から史跡入口部（エントランスゾーン）の遺構確認調査に着手し、古墳の保存修理および周辺環境整備に関する基礎資料の収集を継続して実施してきた。

調査対象は、エントランスゾーンに所在する24基の古墳である。大室古墳群大室谷支群村東単位支群の26～29号墳・235号墳・237～247号墳・A～D号墳・ハ号墳と、鳶岩単位支群の31～33号墳であり、2007（平成19）年度に新たに確認されたC1区のE号墳を加えて、これまでに調査した延べ古墳数は67基、総面積は3,315㎡である（2007年度末現在）。

本章ではこのうち、B区（245・246号墳）、C1区（26・A～D・ハ号墳）、C2区（27～29・241・242号墳）、C3区（237～240号墳）、D区（235号墳）の19基の古墳を除く、A区（243・244号墳）とE区（31～33号墳）に位置する5基を調査し確認できたすべての遺構について報告する。

なお、遺構確認調査はその目的や性格別に大きく3つに区分した。草刈り清掃や墳丘測量など現況調査を目的とした予備調査と、各古墳の墳端確認を主目的とした試掘調査、そして改変状況や墳丘構造の確認などを目的とした発掘調査である。

以下、各年度の調査内容について概述する。

1998（平成10）年度

史跡指定後、本格的な調査が開始された年であり、各古墳の基礎的データを収集するために予備調査から開始した。予備調査を実施した古墳は、エントランスゾーンの北西部分に位置する村東単位支群の26・27・242・243・244・A・B・D・ハ号墳の9基（5,700㎡）である。各古墳の範囲や残存状況を確認するための試掘調査も、26・27・242・243・244・B号墳の6基（110㎡）で着手している。なお、ガイダンス施設大室古墳館への園内道路施工に先立って路線範囲内の試掘調査（3,000㎡）も実施したが、古墳などの遺構は確認されなかった。

1999（平成11）年度

前年度に引き続き、予備調査と試掘調査を実施した。測量を実施した古墳は、エントランスゾーンの北東部分と南西部分に位置する28・29・237・238・239・240・241・245・246・247・C号墳の11基（5,500㎡）である。試掘調査を実施した古墳は26・29・241・243・244・246・A・C・ハ号墳の9基（170㎡）である。また、246号墳北東において発見された大型の石と礫の集積箇所に関して、遺構の可否を確認するための試掘調査を実施したが、古墳などの遺構は確認されなかった。

2000（平成12）年度

未着手であった鳶岩単位支群の31・32・33号墳と235号墳の4基（5,500㎡）の予備調査を実施し、エントランスゾーンに分布する古墳の予備調査は終了した。試掘調査を実施した古墳は27・28・29・237・238・239・240・241・245・246・247・D号墳の12基（170㎡）である。

2001（平成13）年度

試掘調査を実施した古墳は31・32・33・235号墳の4基（60㎡）である。これをもって、エントランスゾーン

に分布する古墳の試掘調査は終了した。また、保存修理本格着手へ向けて、244号墳では発掘調査(240㎡)を実施し、古墳外表施設である石積みの遺存状況を記録する写真測量(400㎡)も実施した。

2002(平成14)年度

前年度に着手した244号墳の発掘調査(600㎡)を継続し、古墳外表面および墳丘内部の検出遺構を記録するために、立面図などの写真測量(208㎡)も併せて実施した。

2003(平成15)年度

244・243号墳の2基(770㎡)について発掘調査を実施した。244号墳では、これまでの検出遺構を記録するため平面図などの空撮測量(1100㎡)を実施した。本年度をもって、244・243号墳の発掘調査は一応の区切りをつけた。また、構造調査の基礎資料として、横穴式石室の実測調査を33・200・235・246号墳で実施している。

2004(平成16)年度

235・237・238・239・240・246号墳の6基(380㎡)について発掘調査を実施した。246号墳は、保存修理工事にともなって実施した遺構確認調査であり、また石室側壁体が露出して崩壊の危機に瀕している235号墳も範囲確認を目的に実施した。また、構造調査の基礎資料として、横穴式石室の実測調査を26・184・137号墳で実施している。

2005(平成17)年度

26・27・28・29・241・242・A・B・C・D・ハ号墳の11基(260㎡)について発掘調査を実施し、本年度をもってエントランスゾーンに分布する古墳の発掘調査を終了した。また、前年度に台風23号による被害を受けた音無川の改修工事に先立ち、古墳を含めた遺構の有無を確認するために3箇所のトレンチによる試掘調査を実施したが、古墳などの遺構は確認されなかった。



谷地形検出状況(平成18年度)

2006(平成18)年度

現状で古墳の存在が確認されていないエントランスゾーン中央部に位置する芝生広場予定地部分について、古墳の痕跡などの有無について確認するための試掘調査(375㎡)を実施した。調査地は多くの古墳が分布するC区とは音無川をはさんで対岸に位置するが、古くから畑地として利用されていたため土地の改変が著しく、古墳の存在は知られていない。畑地の造成にともなって構築された石垣内に古墳との関連が疑われる部分が認められたため、1～4トレンチを設定してその当否を確認した。また、一帯の旧地形を確認するため5～8トレンチを設定し、あわせて調査を行った。



E号墳石室検出状況(平成19年度)

2007(平成19)年度

平成19年度から開始した地形復元工事の施工範囲

について、未確認古墳の有無を確認するための試掘調査（180㎡）を実施した。エントランスゾーン一帯の地形は、石垣をとともなう複数の平坦面に改変されているが、ところどころ積石塚状の石積みの高まりが観察されるため、9～12トレンチを設定して古墳か否かを確認する調査を実施した。調査の結果、9～11トレンチでは古墳ではないことが判明したが、12トレンチからはこれまで未確認であった横穴式石室墳1基の痕跡を発見し、E号墳と命名した。

2008（平成20）年度以降

平成20年度の遺構確認調査は、C3区古墳3基の保存修理工事が施工されるため、該当する238～240号墳について、事前の遺構確認調査を実施した後、その成果を検討しながら保存修理工事に着手する。

平成21年度については、保存修理工事の対象がC2区およびA区となるため、該当する古墳27・29・241～244号墳の6基について、遺構確認調査を実施する予定である。ただし、A区の保存修理工事は翌22年度まで継続するため、工事工程との調整を図りながら実施する。

平成22年度は、A区とC1区が保存修理工事の対象となるため、26・A～E・ハ号墳、243・244号墳の9基について、遺構確認調査を実施する予定である。

整備最終年度となる平成23年度は、E区の3基が保存修理工事の対象となり、31～33号墳3基の遺構確認調査を実施する予定である。なお、B区の245号墳（死人塚）については、それまでの整備工事との調整の中で調査実施時期について検討することとする。

また、この他にも整備工事の施工範囲や古墳の可能性が考えられる箇所についての遺構確認調査は適宜継続していく。

| 年度 | 対象古墳 | 調査面積 | 測量面積 | 調査期間（下段は実質調査日） | | | 調査員等人数 | | |
|--------------------|------|--------|---------|----------------|-----------------|------------------|--------|------|------|
| | | | | 着手日 | 完了日 | 日数 | 調査員 | 補助員 | 作業員 |
| 1998年度 （平成10年度） | 9基 | 110㎡ | 5,700㎡ | 7月1日 7月7日 | 3月26日 9月30日 | 265日間 83日間 | 5人 | 28人 | 20人 |
| 1999年度 （平成11年度） | 16基 | 170㎡ | 5,500㎡ | 7月1日 7月12日 | 3月24日 9月30日 | 263日間 78日間 | 6人 | 17人 | 18人 |
| 2000年度 （平成12年度） | 16基 | 170㎡ | 5,500㎡ | 7月3日 8月1日 | 3月30日 9月14日 | 267日間 43日間 | 6人 | 24人 | 18人 |
| 2001年度 （平成13年度） | 5基 | 300㎡ | 400㎡ | 7月2日 7月31日 | 3月29日 11月16日 | 267日間 106日間 | 8人 | 38人 | 25人 |
| 2002年度 （平成14年度） | 1基 | 600㎡ | 208㎡ | 7月1日 8月1日 | 3月28日 12月11日 | 267日間 130日間 | 8人 | 34人 | 29人 |
| 2003年度 （平成15年度） | 2基 | 770㎡ | 1,100㎡ | 7月1日 8月1日 | 3月31日 12月1日 | 270日間 120日間 | 12人 | 33人 | 26人 |
| 2004年度 （平成16年度） | 6基 | 380㎡ | 100㎡ | 7月12日 7月15日 | 3月30日 12月24日 | 258日間 159日間 | 14人 | 36人 | 24人 |
| 2005年度 （平成17年度） | 11基 | 260㎡ | 100㎡ | 7月12日 7月29日 | 3月30日 12月12日 | 258日間 133日間 | 9人 | 43人 | 21人 |
| 2006年度 （平成18年度） | 0基 | 375㎡ | 459㎡ | 9月15日 9月15日 | 3月30日 12月6日 | 195日間 81日間 | 12人 | 0人 | 36人 |
| 2006年度 （平成19年度） | 1基 | 180㎡ | 380㎡ | 8月1日 9月13日 | 3月31日 12月1日 | 240日間 78日間 | 8人 | 0人 | 30人 |
| 合計 （延べ数） | 67基 | 3,315㎡ | 19,447㎡ | | | 2,355日間 930日間 | 88人 | 253人 | 247人 |

表3 年度別調査の諸元表

| | | 1998年度 平成10年度 | 1999年度 平成11年度 | 2000年度 平成12年度 | 2001年度 平成13年度 | 2002年度 平成14年度 | 2003年度 平成15年度 | 2004年度 平成16年度 | 2005年度 平成17年度 | 2006年度 平成18年度 | 2007年度 平成19年度 |
|-----|---------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| A区 | 243号墳 | 測量・ 試掘 | 試掘 | | | | 発掘 | | | | |
| | 244号墳 | 測量・ 試掘 | 試掘 | | 発掘 | 発掘 | 発掘 | | | | |
| | 23号墳 ※1 | | | | | | | | | | |
| B区 | 245号墳 | | 測量 | 試掘 | | | | | | | |
| | 246号墳 | | 測量・ 試掘 | 試掘 | | | | 発掘 設計・工事 | | | |
| | 247号墳 ※2 | | 測量 | 試掘 | | | | | | | |
| C1区 | 26号墳 | 測量・ 試掘 | 試掘 | | | | | | 発掘 | | |
| | A号墳 (26-A) | 測量 | 試掘 | | | | | | 発掘 | | |
| | B号墳 (26-B) | 測量・ 試掘 | | | | | | | 発掘 | | |
| | C号墳 (26-C) | | 測量・ 試掘 | | | | | | 発掘 | | |
| | D号墳 (?号墳) | 測量 | | 試掘 | | | | | 発掘 | | |
| | E号墳 ※3 | | | | | | | | | | 発掘 |
| | 八号墳 | 測量 | 試掘 | | | | | | 発掘 | | |
| C2区 | 27号墳 | 測量・ 試掘 | | 試掘 | | | | | 発掘 | | |
| | 28号墳 ※2 | | 測量 | 試掘 | | | | | 発掘 | | |
| | 29号墳 | | 測量・ 試掘 | 試掘 | | | | | 発掘 | | |
| | 241号墳 | | 測量・ 試掘 | 試掘 | | | | | 発掘 | | |
| | 242号墳 | 測量・ 試掘 | | | | | | | 発掘 | | |
| C3区 | 237号墳 ※2 | | 測量 | 試掘 | | | | 発掘 | | | |
| | 238号墳 | | 測量 | 試掘 | | | | 発掘 | | | |
| | 239号墳 | | 測量 | 試掘 | | | | 発掘 | | | |
| | 240号墳 | | 測量 | 試掘 | | | | 発掘 | | | |
| D区 | 235号墳 | | | 測量 | 試掘 | | | 発掘 | 養生・ 設計 | 工事 | 工事 |
| E区 | 31号墳 | | | 測量 | 試掘 | | | | | | |
| | 32号墳 | | | 測量 | 試掘 | | | | | | |
| | 33号墳 | | | 測量 | 試掘 | | | | | | |
| その他 | 園内道路試掘 | 大岩試掘 | | | | | 石室実測 | 石室実測地 形確認 | 排水路試掘・ 工事 | 芝生広場試掘 | 地形復元試掘 |

※1 1989（平成元）年に移築復元したものである。

※2 調査の結果、古墳ではないことが判明した。

※3 2007（平成19）年度の調査で新たに確認された古墳である。

表4 古墳別調査／整備状況表

第2節 31号墳

1 立地と現状

31号墳は、大室谷扇状地の北縁に位置する鳶岩単位支群に属し、大星山丘陵南山麓の標高約393mに立地する。東約20mには31号墳が近接している。本古墳は墳丘の高まりが畑の造成によって観察出来ない状況であった。また天井石が露出した横穴式石室が畑の石垣中に開口しており、石室全体が簡易な小屋に覆われていた。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。表面観察では、外周を廻る石列などは確認することができなかった。

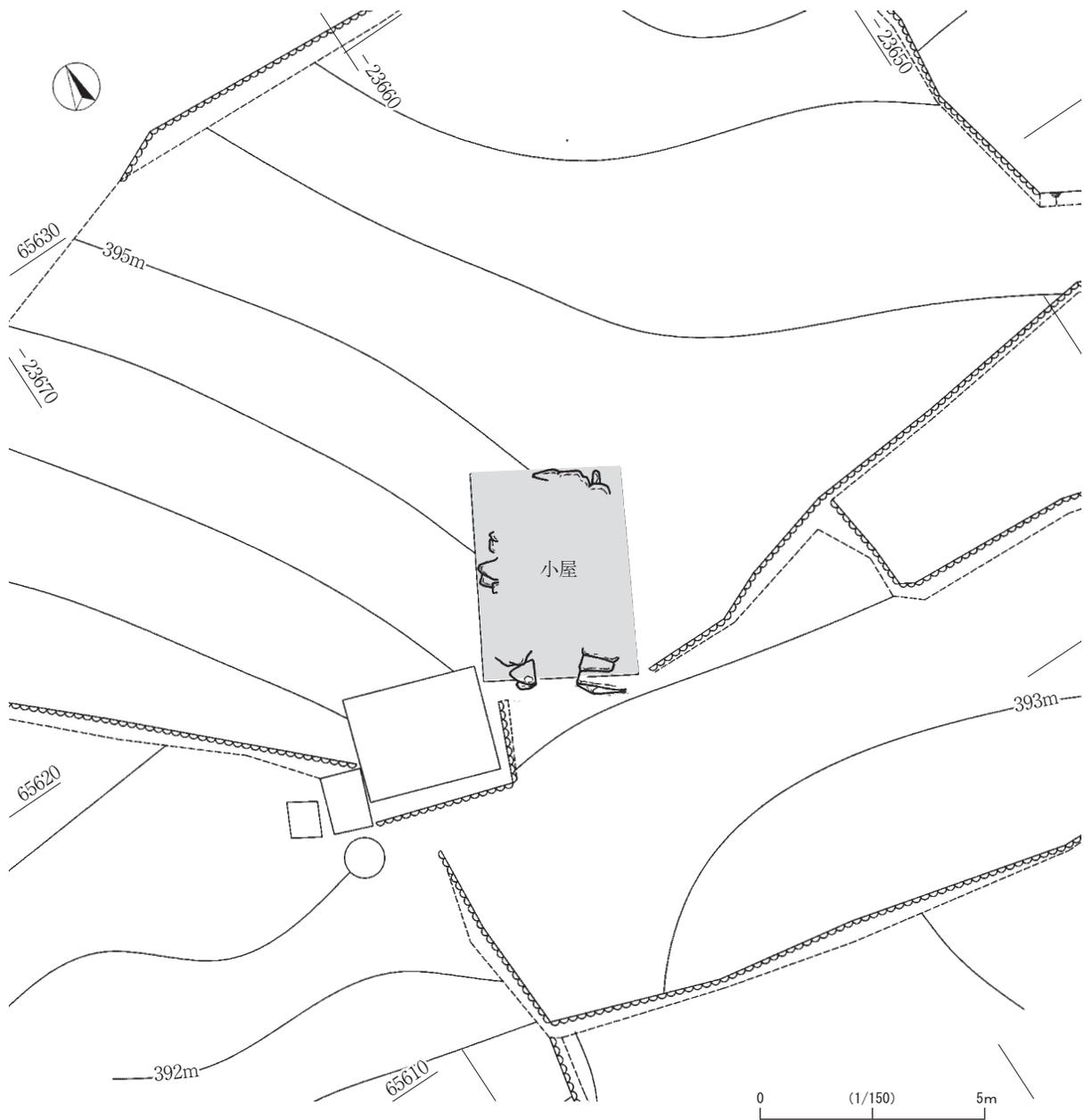


図4 31号墳墳丘測量図 (1/150)

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は、ゆるい胴張りの両袖式横穴式石室と判断されるが、石垣面と一体化している袖部の石材は動かされている可能性も考えられる。玄室の主軸はN-56°-Eを測り、南西方向に開口している。石室の規模は、推定袖部まで全長4.65m、玄室幅は最も広くなる中央部で2m、最も狭くなる奥壁側と玄門側で1.75mを測る。

4 調査概要

本古墳は、2001（平成13）年度に墳丘の測量と試掘調査を実施した。また、あわせて主体部である横穴式石室の測量調査も実施した。試掘調査は石室主軸に合致する任意の座標に基づいて2本のトレンチを設定した。

1 トレンチ

墳丘西側の調査区である。調査の結果、調査区西寄りで墳丘外周を示す石列を検出したほか、その内側から墳

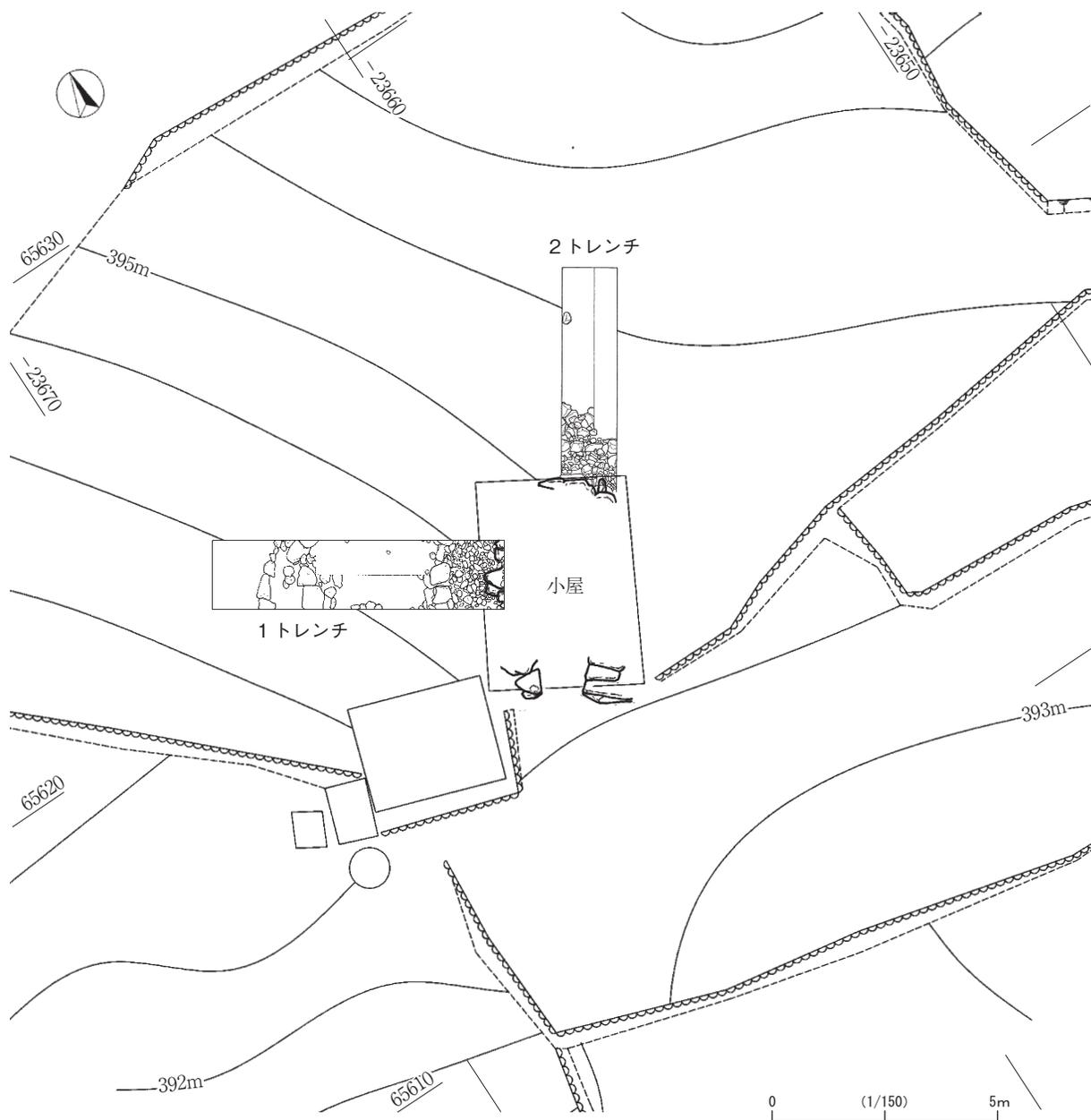
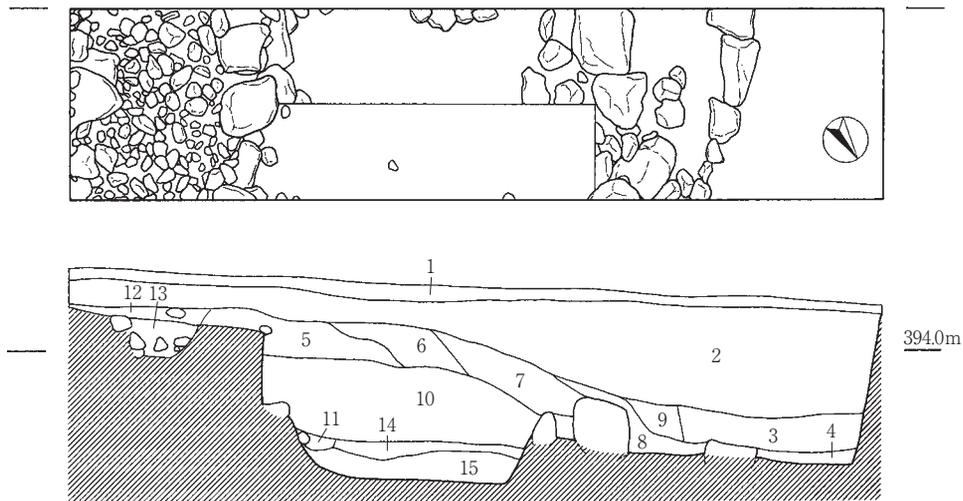
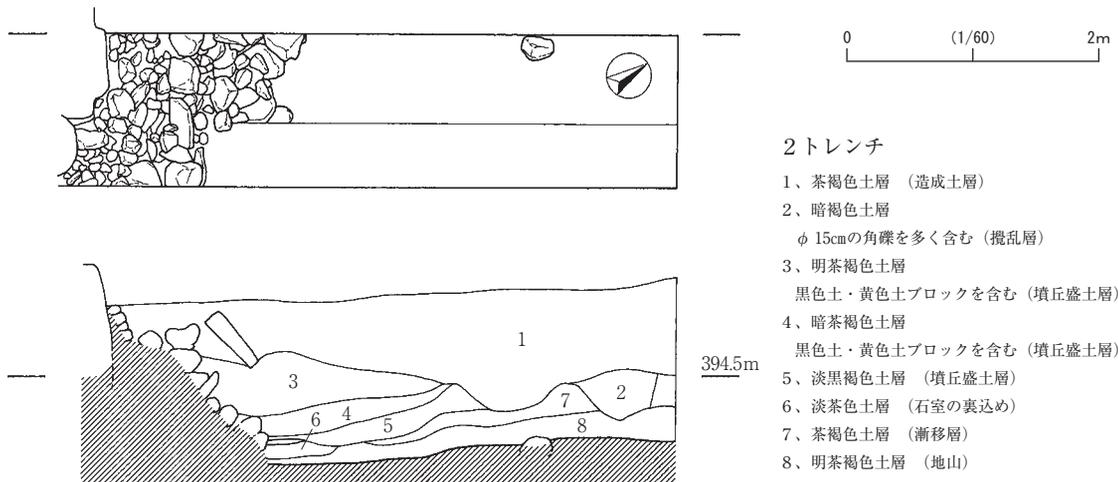


図5 31号墳調査成果図 (1/150)



1 トレンチ

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1、黒色土層 (表土層) | 9、暗茶褐色土層 黒色土ブロックを多く含む (墳丘盛土層) |
| 2、黄褐色土層 (造成土層) | 10、明茶褐色土層 黒色土・黄色土ブロックを多く含む (墳丘盛土層) |
| 3、暗黒褐色土層 人頭大の礫を多く含む (攪乱層) | 11、暗褐色土層 黄色土ブロックを多く含む 拳大の礫を多く含む (墳丘盛土層) |
| 4、暗褐色土層 須恵器を含む (崩落土層) | 12、淡茶褐色土層 φ 10～15cmの礫を多く含む (石室の裏込め) |
| 5、明黄褐色土層 黒色土・黄色土ブロックを多く含む (墳丘盛土層) | 13、明黄褐色土層 φ 15～30cmの礫を多く含む (石室の裏込め) |
| 6、暗黄褐色土層 黒色土・黄色土ブロックを多く含む (墳丘盛土層) | 14、淡黄褐色土層 (漸移層) |
| 7、暗褐色土層 黒色土ブロックを少量含む (墳丘盛土層) | 15、明黄褐色土層 (地山層) |
| 8、淡茶褐色土層 (墳丘盛土層) | |



2 トレンチ

- | |
|------------------------------------|
| 1、茶褐色土層 (造成土層) |
| 2、暗褐色土層 φ 15cmの角礫を多く含む (攪乱層) |
| 3、明茶褐色土層 黒色土・黄色土ブロックを含む (墳丘盛土層) |
| 4、暗茶褐色土層 黒色土・黄色土ブロックを含む (墳丘盛土層) |
| 5、淡黒褐色土層 (墳丘盛土層) |
| 6、淡茶色土層 (石室の裏込め) |
| 7、茶褐色土層 (漸移層) |
| 8、明茶褐色土層 (地山) |

図6 31号墳トレンチ個別図 (1/60)

丘内部に埋め込まれた石列を検出した。外周の石列は下部構造と考えられる小型石の列であった。東寄りの石室側では石室裏込め石材とこれを擁護する2段の控え積みを検出した。これを覆う墳丘盛土は比較的良く残存しており、版築状に堅く叩き締められている状況が確認できた。

2 トレンチ

墳丘北側の石室裏側に位置する調査区である。調査の結果、調査区南寄りの石室側で石室裏込め石材とこれを擁護する控え積みを検出したが、これより北側は攪乱が深く及んでいたために墳丘範囲を示す遺構は検出できなかった。

本古墳の規模・墳形は、1 トレンチで検出された墳裾と石室との位置関係から、径約 14 m の円墳であると推定される。

第3節 32号墳

1 立地と現状

32号墳は、大室谷扇状地の北縁に位置する鳶岩単位支群に属し、大星山丘陵南山麓の標高約396mに立地する。西約20mには31号墳、南東約18mには33号墳が近接している。本古墳は墳丘の高まりが畑の造成にともない著しく改変されており、石垣に取り込まれた墳丘西側からは横穴式石室の天井石・側壁が一部分露出していた。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。表面観察では外周を廻る石列などは確認することができなかった。



図7 32号墳墳丘測量図 (1/150)

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は南向きに開口する横穴式石室であるが、天井石・側壁の一部が露出しているのみで詳細は不明である。

4 調査概要

本古墳は、2001（平成13）年度に墳丘の測量と試掘調査を実施した。試掘調査は石室主軸に合致する任意の座標に基づいて2本のトレンチを設定した。

1 トレンチ

墳丘西側の調査区である。調査の結果、調査区西寄りで墳丘外周を廻る石列を検出したほか、中央から東寄りの石室側では石室裏込め石材とこれを擁護する控え積みを検出した。深くまで攪乱が及んでいたため、外周の石列は最下段のみが検出された。

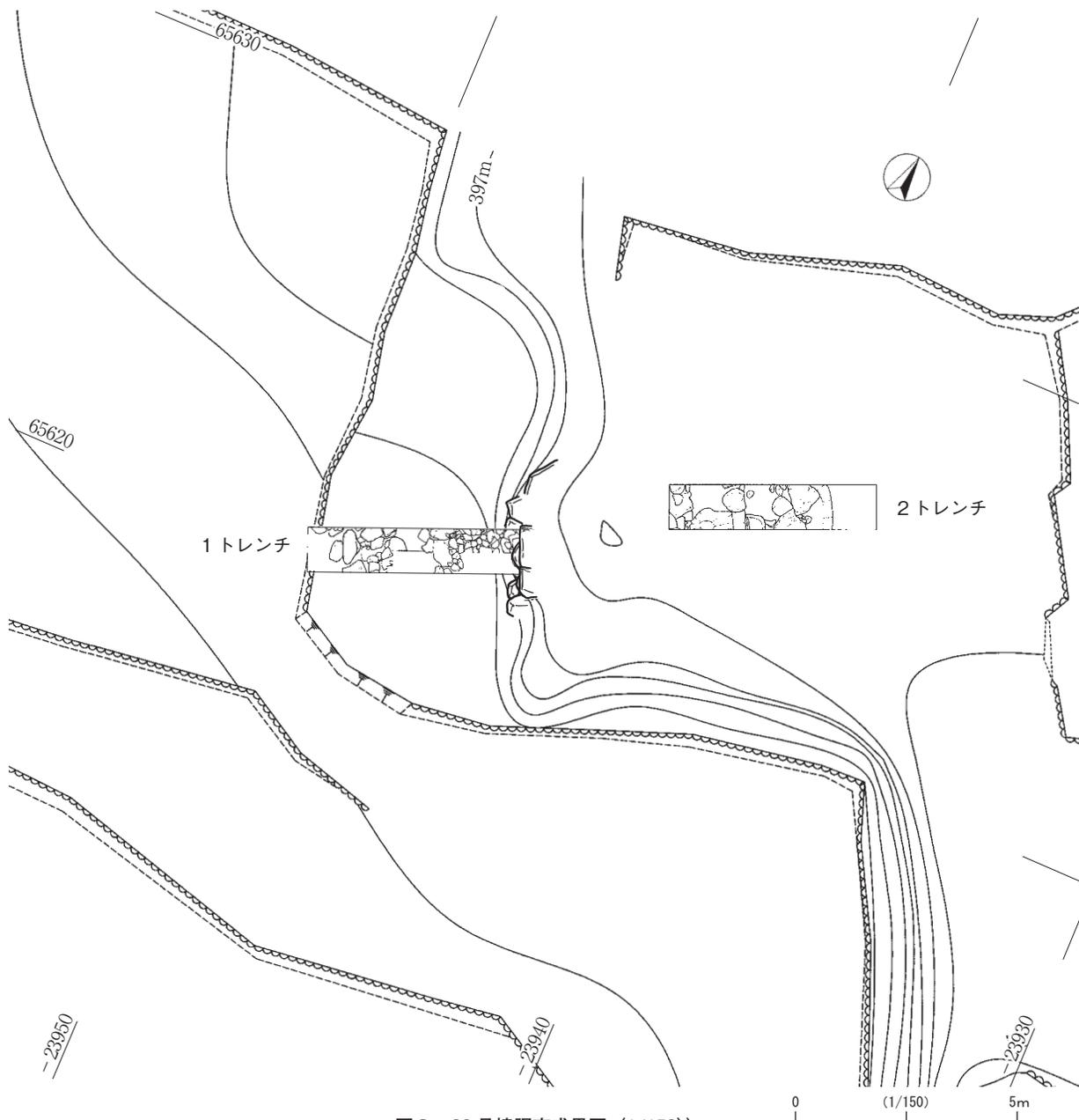


図8 32号墳調査成果図 (1/150)

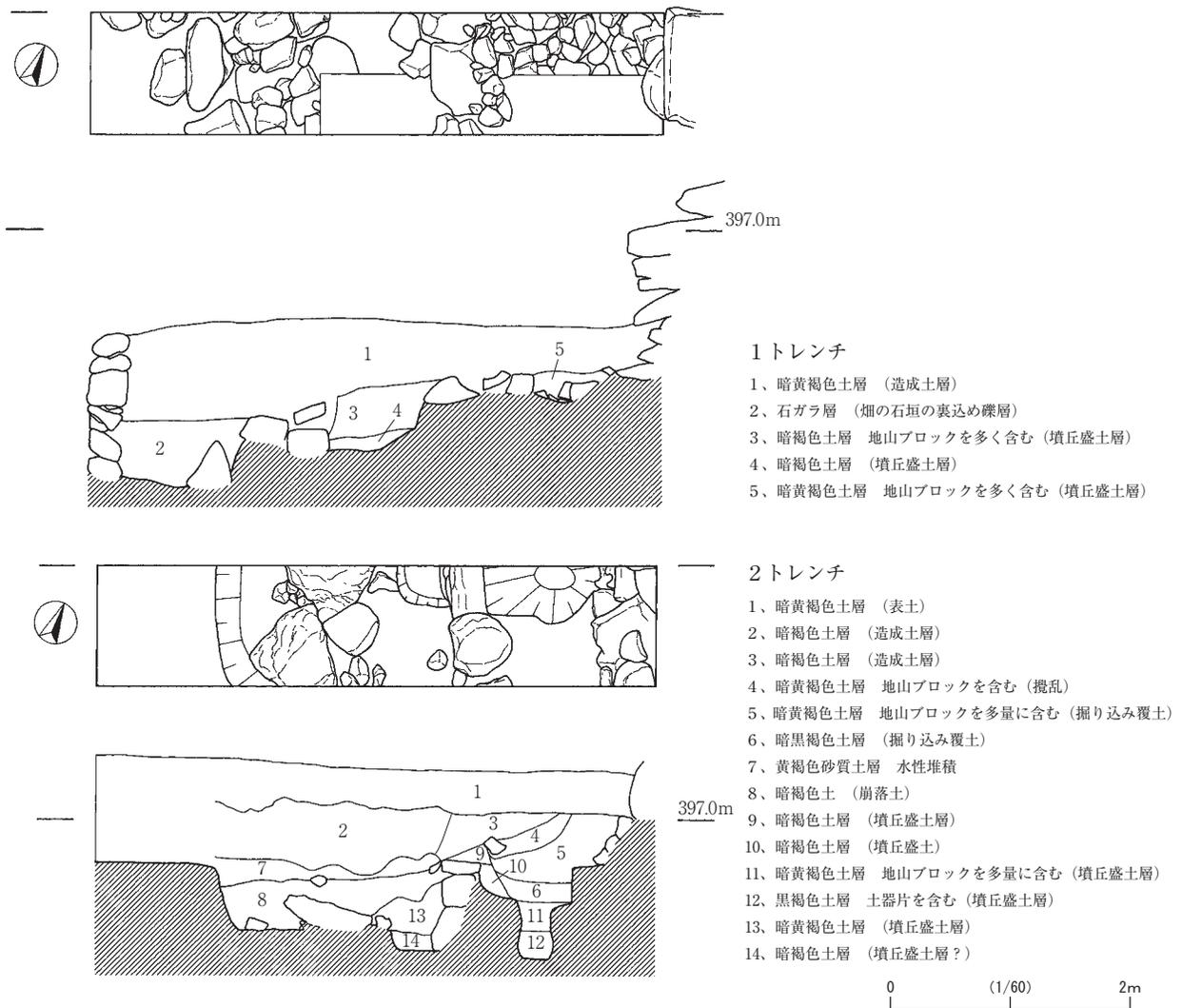


図9 32号墳トレンチ個別図 (1/60)

2 トレンチ

墳丘東側の調査区である。調査の結果、調査区中央付近で墳丘外周を廻る石列と墳丘内部に埋め込まれた石列を検出したほか、西端では石室裏込め石材が検出された。深くまで攪乱が及んでいたため、外周の石列は最下段のみが検出された。なお、埋め込みの石列と石室裏込めのための墳丘盛土層内（12層）において、同一個体と思われる壺の破片が出土した。

本古墳の規模・墳形は、検出された墳丘外周の石列の位置関係から径約10mの円墳であると推定される。

第4節 33号墳

1 立地と現状

33号墳は、大室谷扇状地の北縁に位置する鳶岩単位支群に属し、大星山丘陵南山麓の標高約397mに立地する。北西約18mには32号墳が近接している。本古墳は墳丘東側では盛土がほとんど失われて横穴式石室の天井石や側壁が露出し、西側では石垣の構築にともない裾付近が大きく削平されるなど墳丘・石室共に不安定な状態であった。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。表面観察では外周を廻る石列などは確認することができなかった。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室であるが、内部には厚く礫が堆積しており、また羨道部に石垣が構築されるなど後世の改変が著しいため、現状では袖構造の有無は確認できない。石室主軸はN-73°-Eを測り、ほぼ南向き

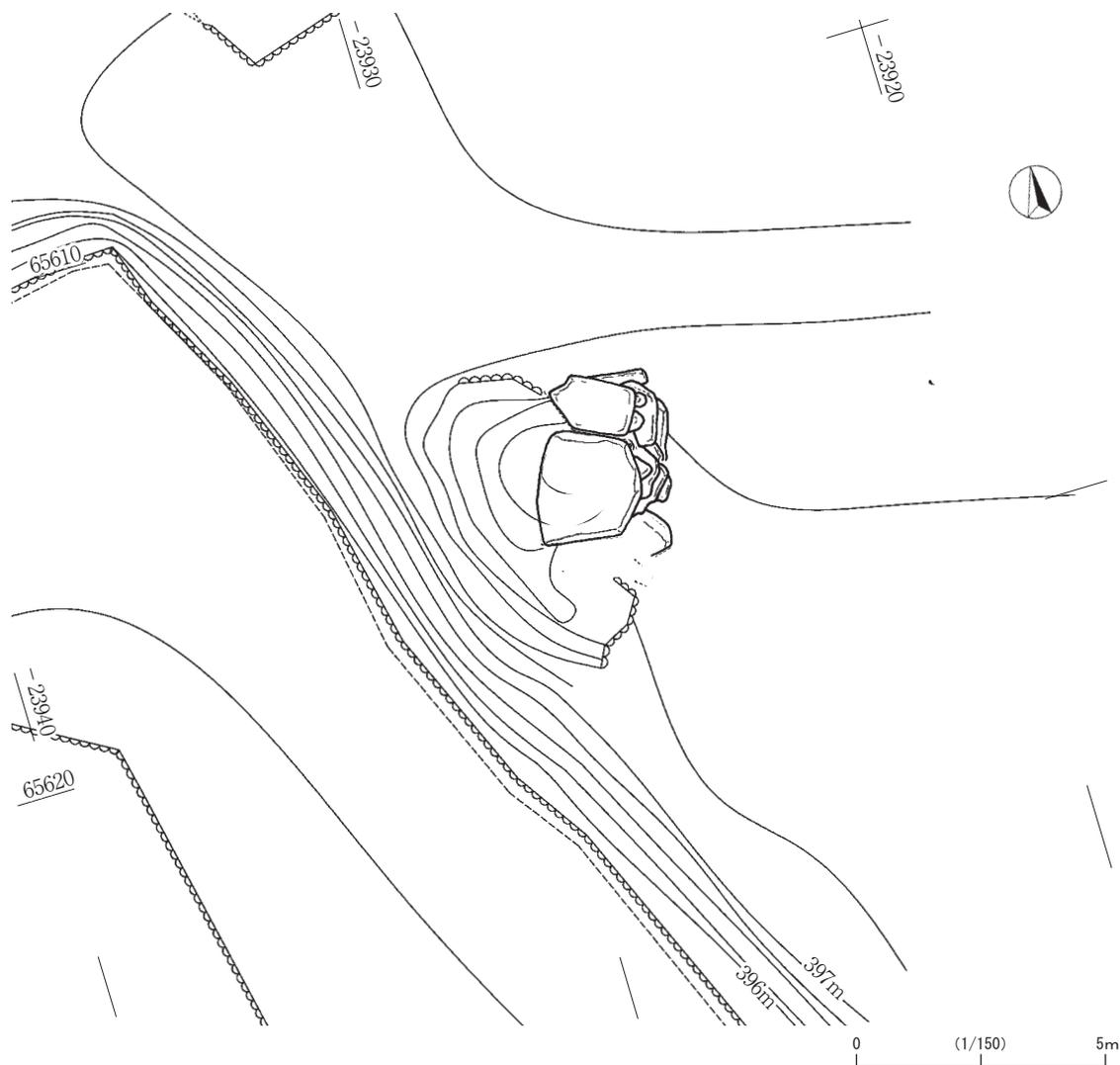


図10 33号墳墳丘測量図 (1/150)

に開口している。露出している部分の観察では、奥壁は1枚で構成されており、天井石は奥壁側から2枚が遺存している。玄室幅は奥壁側で約1.7mを測る。

4 調査概要

本古墳は、2001（平成13）年度に墳丘の測量と試掘調査を実施した。また、2003（平成15）年度には主体部である横穴式石室の測量調査が行われた。試掘調査は石室主軸に合致する任意の座標に基づいて2本のトレンチを設定した。

1 トレンチ

墳丘東側に位置する。調査の結果、調査区の東寄り地山を若干掘り込んで設置した墳丘外周を廻る石列を検出した。また、中央から西寄りの石室側では石室裏込め石材とこれを擁護する控え積みを検出した。控え積みは大振りな石で一段、もしくはこれと同じ高さにそろえた2段の石積みによって構成されていた。

2 トレンチ

墳丘北側の石室裏側に位置する。調査の結果、調査区中央やや北寄りで原位置を若干移動しているものと考えられる墳丘外周を廻る石列を検出した。また、南寄りの石室側では石室裏込め石材とこれを擁護する控え積みを

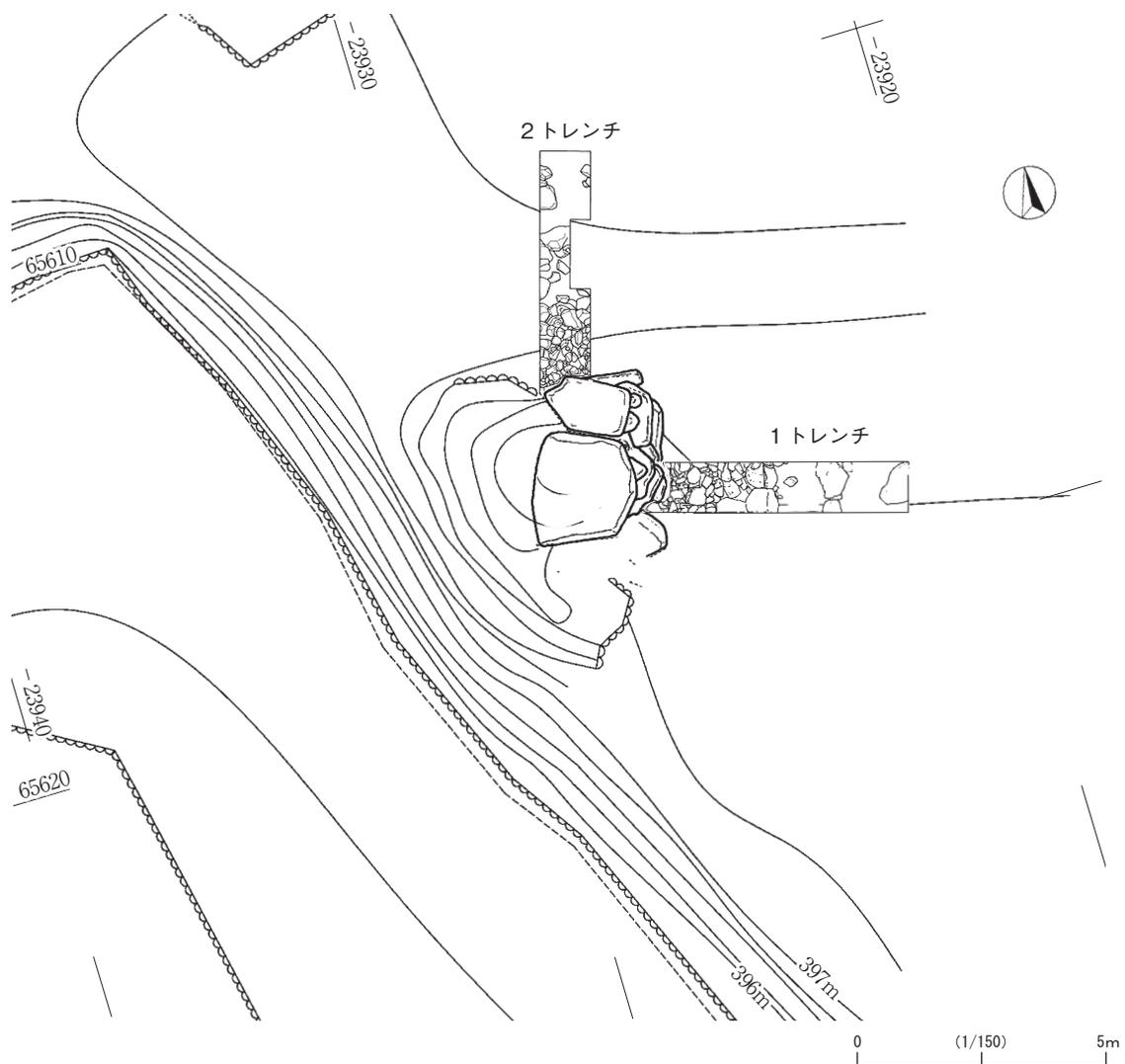


図11 33号墳調査成果図 (1/150)

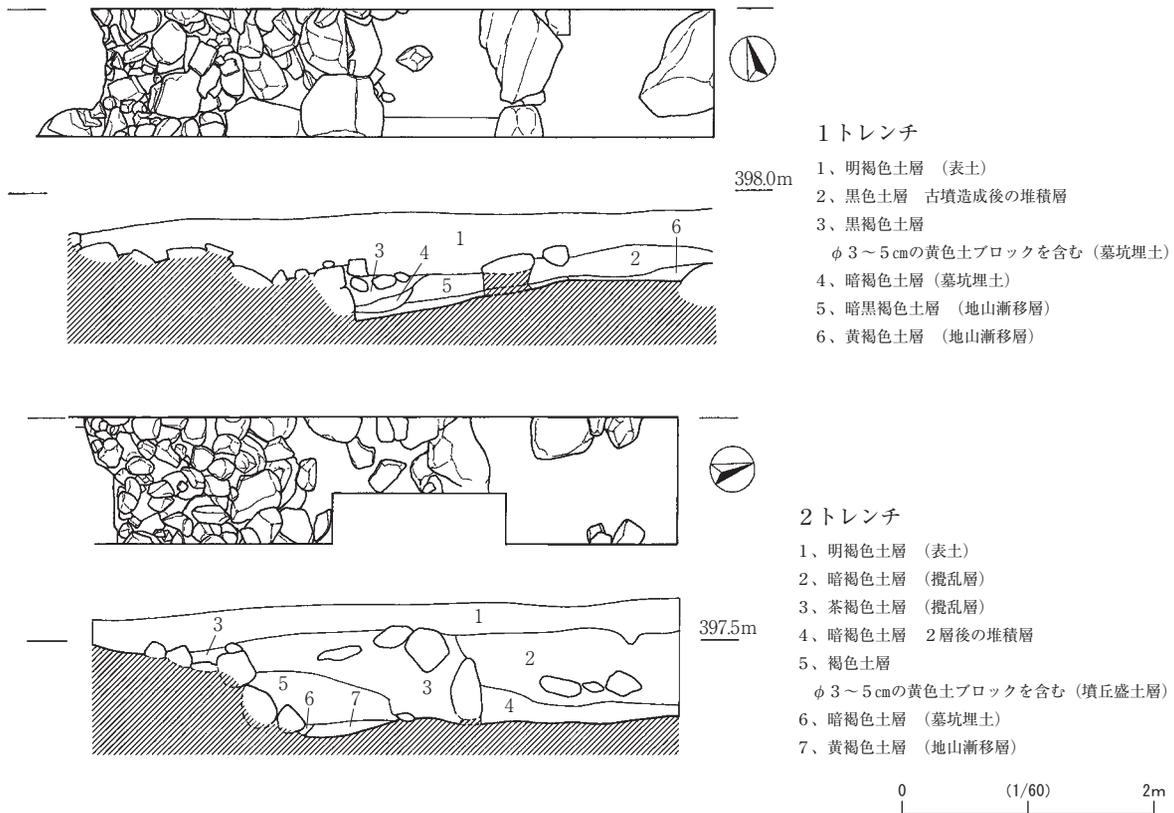


図 12 33号墳トレンチ個別図 (1/60)

検出した。控え積みは3段の石積みによって構成されており、土層断面では最下段の石を設置するための据え方(6層)が確認された。

本古墳の規模は、墳丘の西側が急斜面になっていることから確定するのが困難であるが、1 トレンチで検出された墳丘外周の石列と石室との位置関係から径約 10 m 程度の円墳であったものと考えられる。

第5節 243号墳

1 立地と現状

243号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群に属し、音無川左岸の北西から南東に上がっていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約366mに立地する。北西約30mには244号墳、音無川対岸の東約40mにはC号墳が近接する。本古墳は墳丘北西側が大きく削平を受けており、石室の側壁裏側が完全に露出している。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。表面観察では墳丘の南東側に20～40cm大の割石が列状に廻っているのが確認される。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は無袖式の横穴式石室である。玄室の主軸はN-132-Eを測り、南西方向に向けて開口している。石室の規模は奥壁から羨道部側壁最前端部までが7.6m、玄室幅は奥壁付近で1.5mを測る。天井石は本来6枚で構成されていたと思われるが、羨道付近の2枚は既に崩落している。

4 調査概要

本古墳は明治大学による村東単位支群の調査の一環として、墳丘の一部が1984（昭和59）年度に発掘調査されている。史跡整備にともなう調査としては、1998（平成10）年度に墳丘の測量および試掘調査を、1999（平成11）年度に試掘調査を、2003（平成15）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にトレンチを設定した。

A区

墳丘北東側の石室裏側に位置する調査区で、1998（平成10）年度に2トレンチが設定された場所である。調査の結果、調査区の南西端と中央で、墳丘盛土を押さえる土留めの役割を担っていたと考えられる石列を検出した。外側の石列は大型の石材が最高で2段積まれていたが、内側の石列は比較的大型の石材を用いているものやや乱雑な積み方をしている状況が確認できた。これら土留め石列より北東側は既に削平が及んでいると思われる、本調査区では墳裾は確認できなかった。

C区

墳丘南側の調査区で、1998（平成10）年度に主軸に直交する1トレンチが設定された場所である。調査の結果、墳丘寄りの調査区北西で墳丘盛土とその内部に施された土留めの石列が検出された。須恵器などの古墳にともなうと考えられる遺物は、石室開口部側にあたる調査区西側に偏って多数出土している。

本調査区では古墳とは時期の異なる遺構が複数検出された。調査区北側で検出された掘り込みは、内部に古墳築造以前の表土層が落ち込んでおり、古墳築造以前の掘り込みであると判断できた。また、調査区南側からも掘り込みが一部分検出されたが、覆土内から灰釉陶器が複数出土していることから、古墳築造後の遺構（住居跡と考えられる）と判断した。このほか、時期の特定が困難な掘り込み（ピット）も確認された。

なお、南側では旧寺尾水道の塩化ビニール製の水道管が調査区を横断して検出された。この管はD～F区まで検出されており、後述する244号墳で検出されている管に接続するものと思われる。

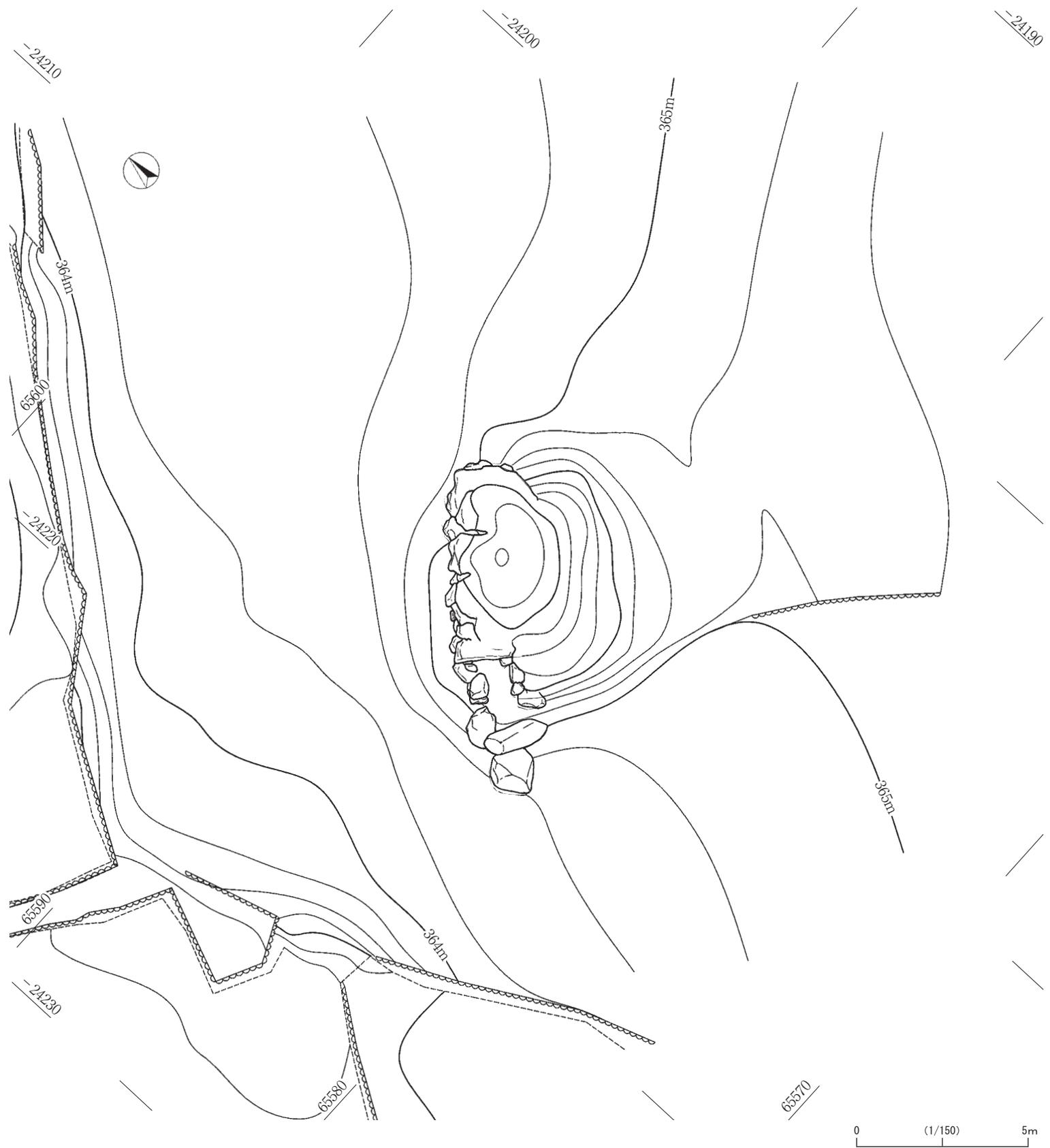


图 13 243号墳丘測量图 (1/150)

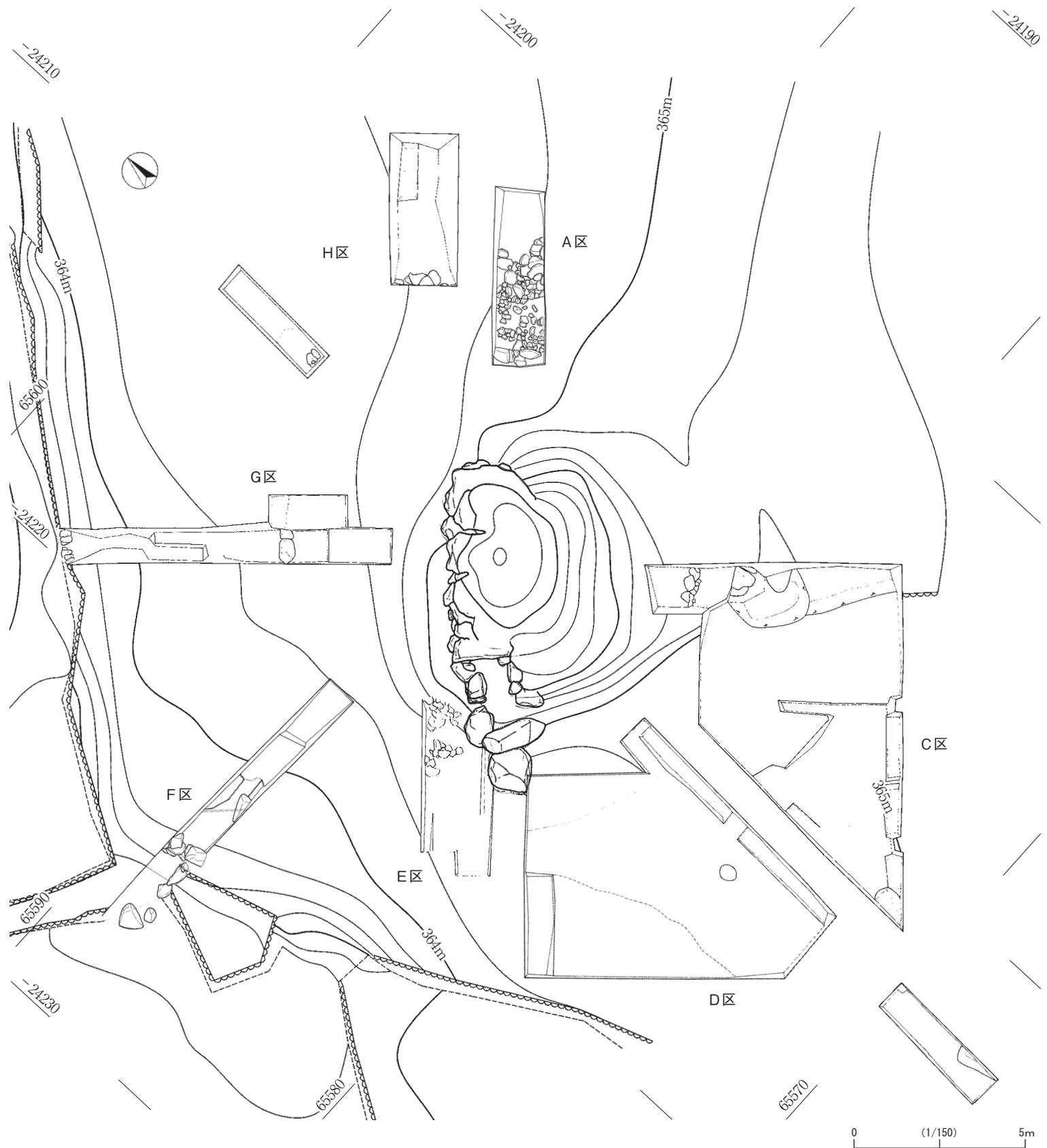


图 14 243号墳調査成果図 (1/150)

D区

墳丘南側の石室開口部左側に位置する調査区である。当該地区では試掘トレンチを設定していなかったため、石室開口部付近ということも考慮してまずC区側の調査区東側にトレンチを入れ、その所見を基に調査区を順次拡張して調査を行った。攪乱耕作土（1層）を除去したところ、墳丘側から盛土層・旧表土層（10層）・堆積層（7層）の順で検出され、堆積土の下には築造時の墳丘外表面が遺存しているものと期待された。しかし、堆積土中には大量の遺物が含まれていたことから、その確認は幅狭のサブトレンチで行うに留め、調査区全体の掘り下げも攪乱層の除去のみに限定して行った。この結果、土層断面で墳丘の外表面と考えられる斜面と、墳丘の裾部分と考えられる傾斜変換点を検出することができた。

先述したように、堆積土内からは須恵器などの遺物が非常に多く出土した。石室開口部に近いことから、追葬時の掻き出し行為が推定されるが、付近に石室内とは異なる葬送儀礼の場の存在を暗示している可能性もある。

E区

墳丘南西側の石室開口部右側に位置する調査区で、1999（平成11）年度に4トレンチが設定された。調査の

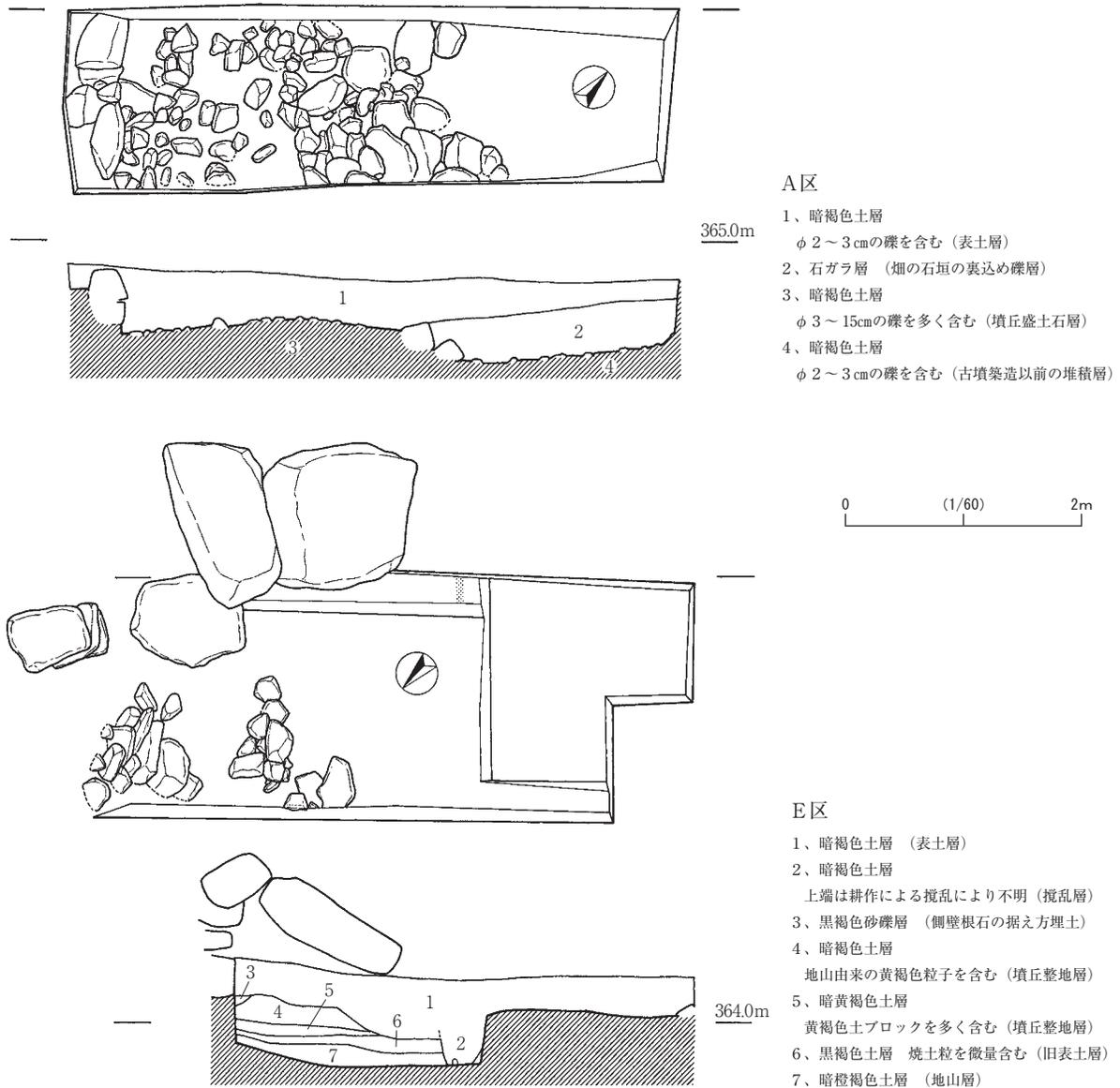


図15 243号墳トレンチ個別図① (1/60)

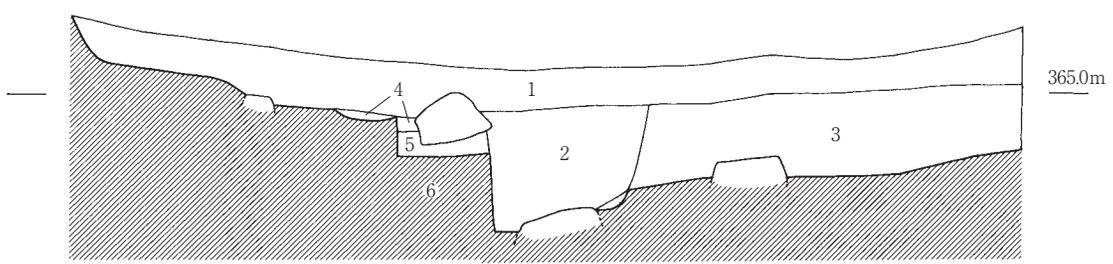
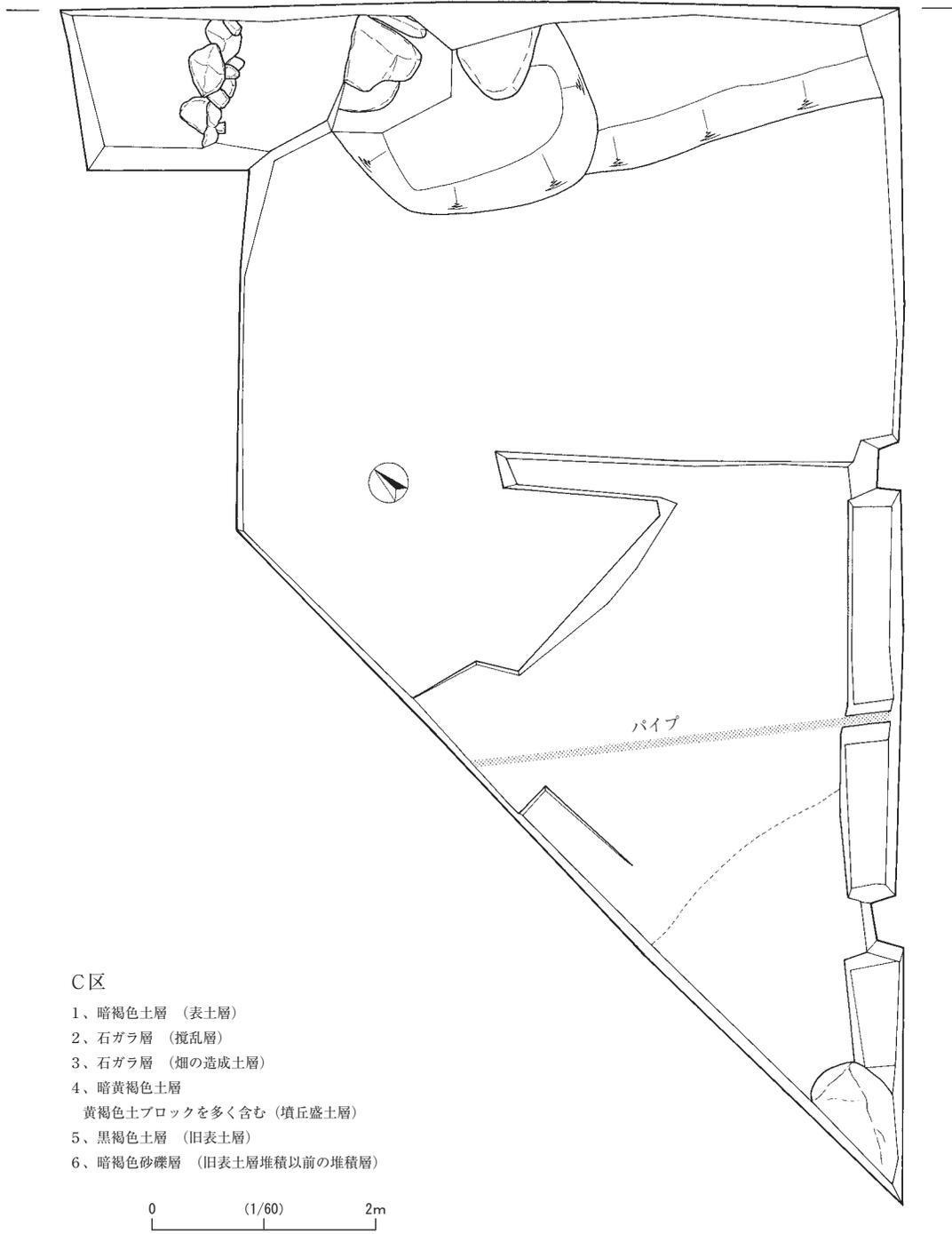


図 16 243号墳トレンチ個別図② (1/60)

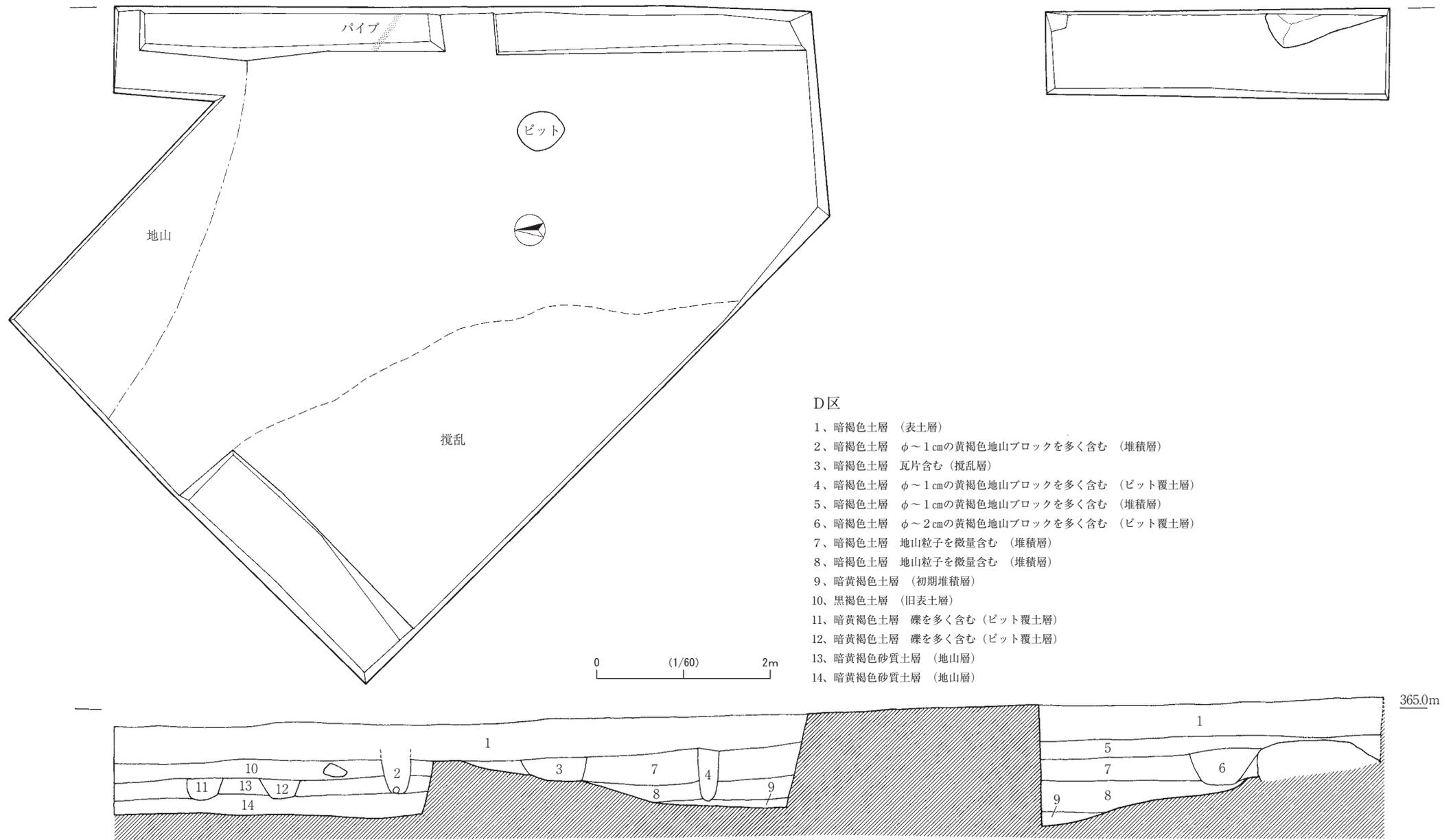


図 17 243号墳トレンチ個別図③ (1/60)

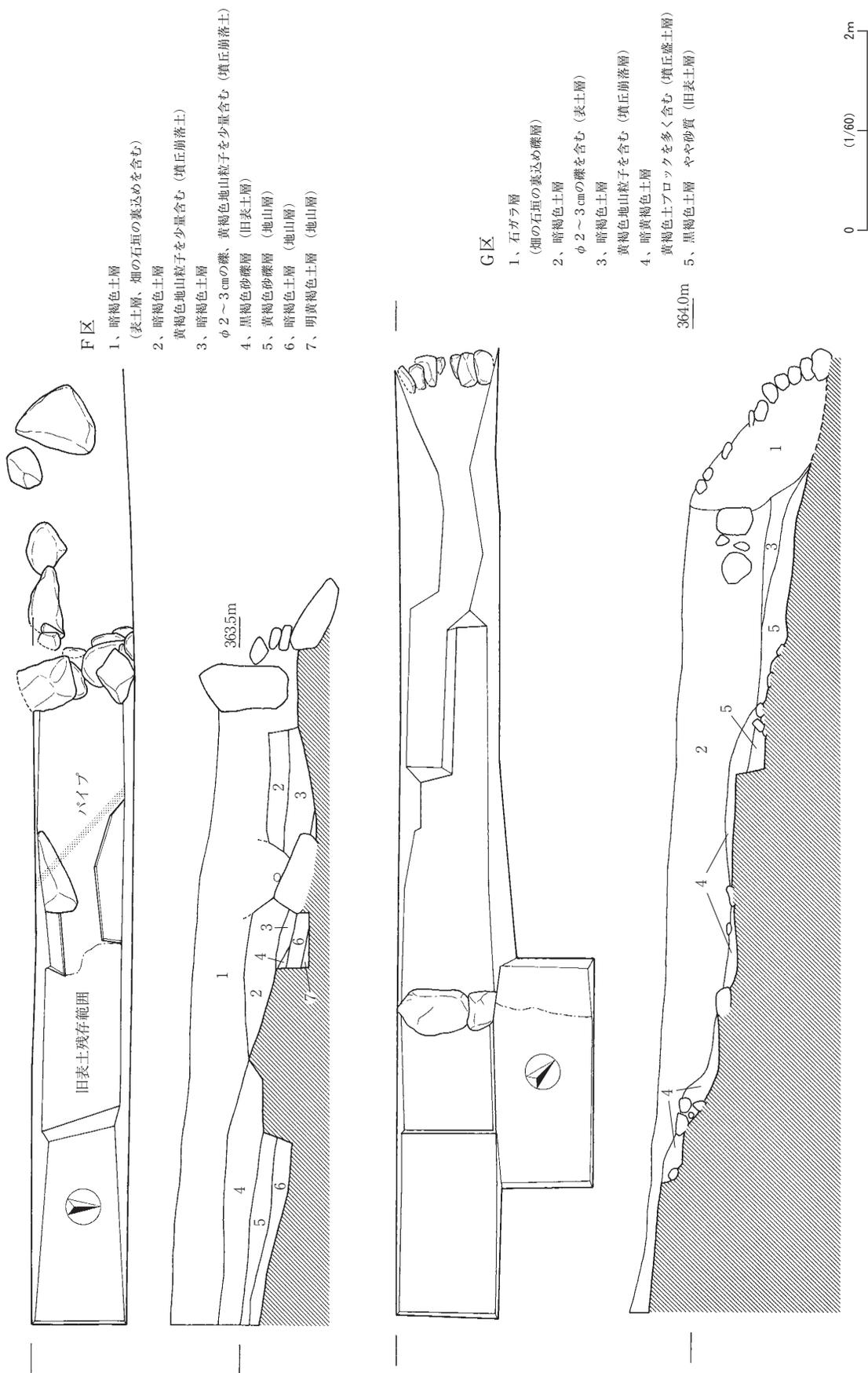
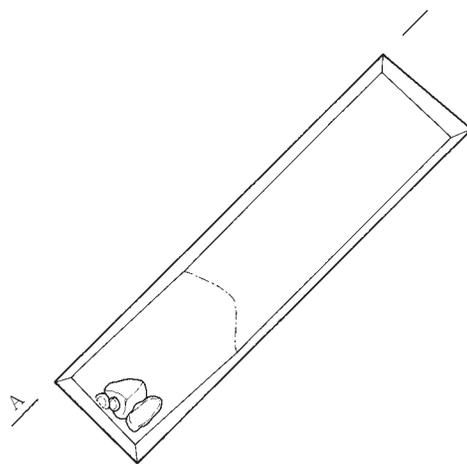


図18 243号墳トレンチ個別図④ (1/60)



H区

Aセクション

- 1、暗褐色土層 φ〜3cmの礫を含む（表土層）
- 2、石ガラ層（畑の石垣の裏込め礫層）
- 3、暗黄褐色土層 拳大の礫、黄褐色土ブロックを含む（墳丘盛土層）

Bセクション

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、石ガラ層（畑の石垣の裏込め礫層）
- 3、暗褐色土層 φ2〜3cmの礫を含む（古墳築造以前の堆積層）
- 4、黒褐色砂礫層 弥生時代後期の土器を含む（古墳築造以前の河川堆積層）
- 5、黒褐色土層 φ2〜3cmの礫を含む（古墳築造以前の堆積層）

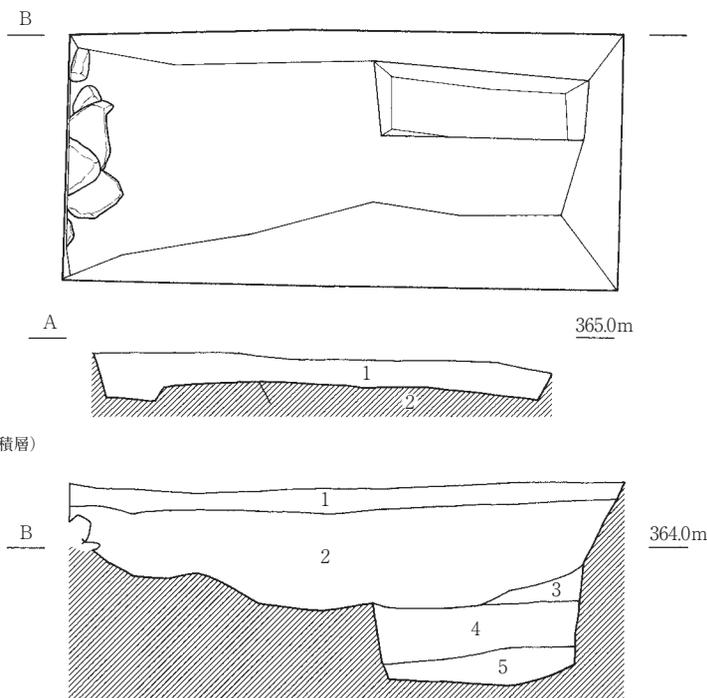


図19 243号墳トレンチ個別図⑤ (1/60)

結果、調査区北端付近で石室の裏込め施設とその外側の墳裾と推定される石列が検出された。石列と裏込め施設の間には小礫の充填が認められた。また土層断面の観察から、石室壁体の設置にあたっては削平整地を行った上に盛土整地（4・5層）を行い、改めて据え方（3層）を掘り込んでいることが確認できた。調査区南西側では攪乱層を除去するに留めたが、古墳（石室）にともなうと思われる痕跡は何も確認できなかった。

F区

墳丘西側に位置する調査区である。調査の結果、崩落土（2・3層）に覆われた状態で旧表土を含む地山を削りだした墳丘斜面と傾斜変換点が確認できた。ただし、この傾斜変換点を墳丘裾と認定する可否は意見の分かれるところである。

遺物は古墳築造前の弥生時代後期の土器が少量出土したが、古墳にともなうと考えられる遺物はほとんど出土しなかった。

G区

墳丘北西側の調査区で、1999（平成 11）年度に主軸に直交する 3 トレンチが設定された場所である。調査の結果、深くまで及んだ攪乱によって墳丘盛土のほとんどは既に削平されていたが、調査区南東寄りでは大型の石を配した石列が検出された。当初はこれを古墳の外周を示す石列と考えたが、土層断面を精査したところ墳丘盛土（4 層）は石列外まで連続していることから、墳丘に埋め込まれた土留め石列であることが確認された。

H区

墳丘北側の石室裏側に位置する調査区である。遺構の状況を確認するための調査区を 2 箇所設定して掘り下げを行った。調査の結果、両調査区の南西端において石列が検出された。ここから北東側は攪乱が深くまで及んでいたが、それぞれが隣接する調査区の所見から墳丘盛土内の埋め込み石列であったと考えられる。墳丘の痕跡が残存していない箇所でも部分的に深掘りを行ったところ、小礫を非常に多く含む旧表土層が厚く堆積していることが確認できた。当該箇所は音無川流路に近いことから、旧表土層の堆積にあたっては河川堆積も関係しているものと思われる。

第6節 244号墳

1 立地と現状

244号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群に属し、音無川左岸の北西から南東に上がっていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約360mに立地する。南東約30mには243号墳が近接している。本古墳は大室古墳群内でも屈指の規模を誇っていることから通称「將軍塚」と呼ばれ、古墳群の象徴的な存在となっている。墳丘北西側（谷側）が現林道の敷設にともない墳丘裾付近で大きく削平され、その他の方面は石垣をともなった段々畑に造成されているなど周辺の地形は大きく改変を受けているが、墳丘および石室の遺存状態は良好である。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。現状の墳丘形状は西側（谷側）と東側（山側）では異なっており、西側では中段にテラスを備えた2段構造を呈しているのに対して、東側ではそのような段構造は見られない。本書ではこの段構造の上半部を「上段丘」、下半部を「下段丘」と呼称することとする。

上段丘は下半が石垣状の石積みによって覆われている。最も残存状況が良好なのは石室の裏側にあたる北東側から北西側で、残存している石材の最高点は標高約365.6m（墳頂は標高367.3m）である。石垣状の石積みによって覆われていない部分は盛土石が露出している状態であるが、部分的に埋め込みのものと思われる簡易な石積みも露出している。

下段丘は斜面が礫混じりの土砂に覆われており、墳丘裾付近には大型の石材が墳丘の円周を描くように見え隠れしていた。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は両袖式の横穴式石室で、残存状況は極めて良好である。玄室の主軸はN-44°-Eを測り、南西方向に向けて開口している。石室の規模は奥壁から羨道部側壁最前端部までが11.7m、玄室長は6.5m、玄室幅は奥壁付近で2.2m、玄門付近で1.9mを測る。

4 調査概要

本古墳は明治大学による村東単位支群の調査の一環として、石室羨道部が1984（昭和59）年度に発掘調査されている。史跡整備にともなう調査としては、1998（平成10）年度に墳丘の測量と試掘調査を、1999（平成11）年度に試掘調査を、2001（平成13）から2003（平成15）年度にかけて発掘調査を実施した。調査は墳丘を石室主軸を中心に十六等分し、奥壁側から時計回りにA～P区として必要箇所にトレンチを設定した。

調査では、墳丘外側から周堀（A～G・P区）や張り出し部～前庭部（F～H区）を検出し、また下段丘からは上段丘と同様の石垣状の石積みやこれに関連する石積みを確認した。石垣状の石積みについては上段丘と下段丘に設置されているため、「上段丘石垣状石積み」・「下段丘石垣状石積み」とそれぞれ呼称することとする。

A・B区

墳丘北東側に位置する調査区で、石室から見て裏側から左後方にあたる部分である。1998（平成10）年度にはA区に4トレンチ、B区に7トレンチが設定された。調査区の中央からやや墳丘寄りには地山面まで削平した後に構築された2～3段程度の後世の石垣が存在している。

調査の結果、墳丘寄りで上段丘石垣状石積みを、石垣の前面で周堀をそれぞれ確認した。



图 20 244号填填丘测量图 (1/150)

0 (1/150) 5m

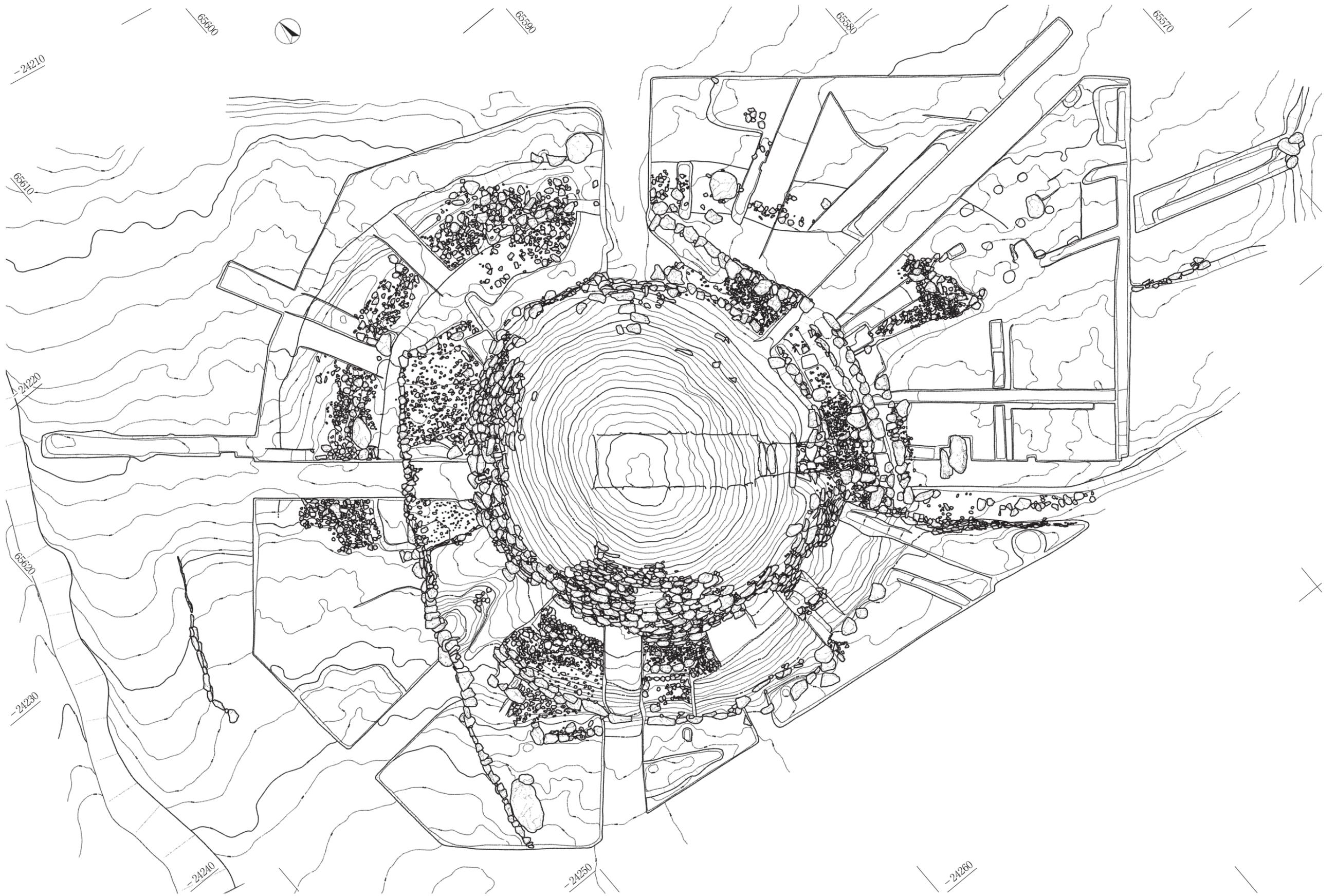


图 21 244 号墳調査成果図 (1/150)

0 (1/150) 5m

上段丘石垣状石積みの裾石下部では礫が敷設されている状況が確認された。

周堀は幅4m前後で断面は浅いU字形を呈し、検出面から底面の最も深い部分まではおよそ80cmを測る。覆土中からは多くの礫が墳丘側斜面を覆うように検出された。これらの礫は検出状況から244号墳の墳丘から崩落してきた盛土石であると考えられる。墳丘と周堀の間には古墳にともなう構造物は検出されていないが、石垣裏込め石層の下面では黒褐色土（Aセクション12層）の残存を確認した。これが旧表土層であるのか下段丘の盛土であるのかは不明である。

なお、A区を音無川付近まで拡張したトレンチでは、北東寄りの音無川付近で河川の流下にもなう土層堆積の痕跡（Aセクション9～11層）を確認している。

C・D区

墳丘東側に位置する調査区で、石室から見て左後方から左側面に当たる部分である。1998（平成10）年度にはC区に6トレンチ、D区に5トレンチが設定された。D区には墳丘に接して堰堤状の後世の石垣が存在する。上段丘石垣状石積みはほとんどの石材が崩落しており、墳丘盛土石もこれにともなって多く流出していることから当該箇所の等高線は乱れている。

調査の結果、墳丘寄りでは上段丘石垣状石積みを、石垣の前面でA・B区に継続する周堀をそれぞれ確認した。

当該箇所の上段丘石垣状石積みはかなり乱れた状態で検出されており、積み直された可能性も考えられる。

周堀の検出幅はC区付近から次第に幅を狭めている。墳丘側の斜面からは墳丘崩落土石がA・B区同様に検出されたが、D区においては墳丘側斜面だけではなく周堀全面から検出された。これについては243号墳から伸びてきた塩化ビニール製の水道管（旧寺尾水道）が当該箇所を通過していることが影響していると考えられる。墳丘と周堀の間には古墳にともなう構造物は検出されていない。

E・F区

墳丘南東側に位置する調査区で、石室から見ると左前方から正面にあたる部分である。調査区北側の墳丘寄りにはG区まで続く高さ1m前後の地山面に設置された石垣が構築されている。

調査の結果、墳丘寄りでは上段丘石垣状石積みを、石垣の前面ではC・D区に継続する周堀と張り出し部をそれぞれ確認した。

周堀はC区付近から更に幅を狭めてF区付近で約2mと最も狭くなり、F区中央付近で古墳築造後の拡幅と見られる掘り込みと融合して平面形が一部判然としなくなっている。平面形はF区から円周を示さず、後述するH区の前庭部前端に向けて開き、石室開口部東側は地山を掘り残した空間を形成している。この空間を張り出し部と仮称するが、西側は畑造成にもなう石垣設置の際に削平を受けており、墳丘本体との取り付け状況は不明である。

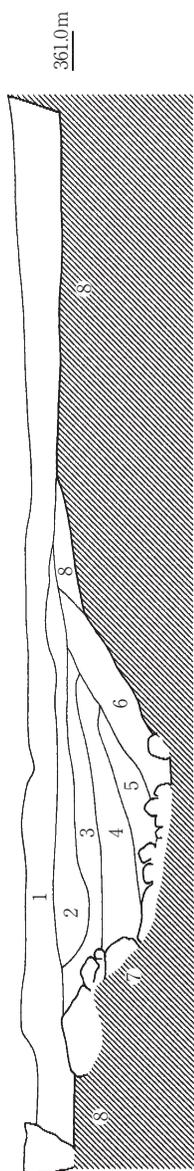
なお、古墳に直接ともなわない別時期の遺構も複数検出された。E区では平安期の住居跡（SI01）を検出した。F区では弥生代後期の住居跡（SI02）と時期・性格ともに不明の遺構（SX01）がそれぞれ検出された。

G・H区

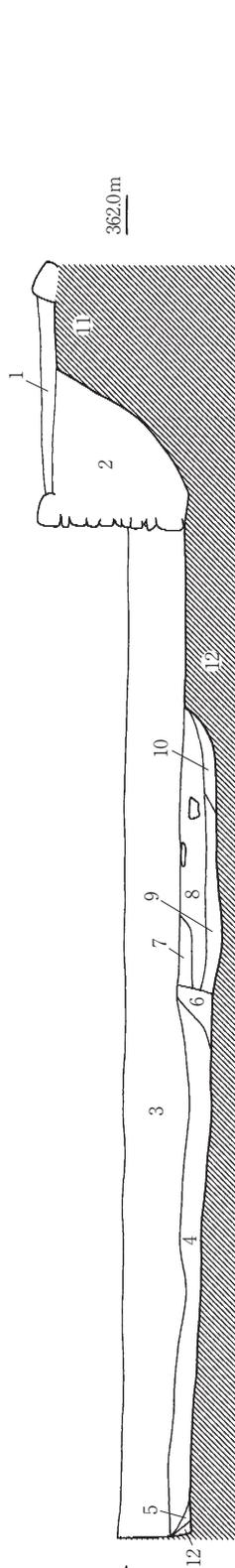
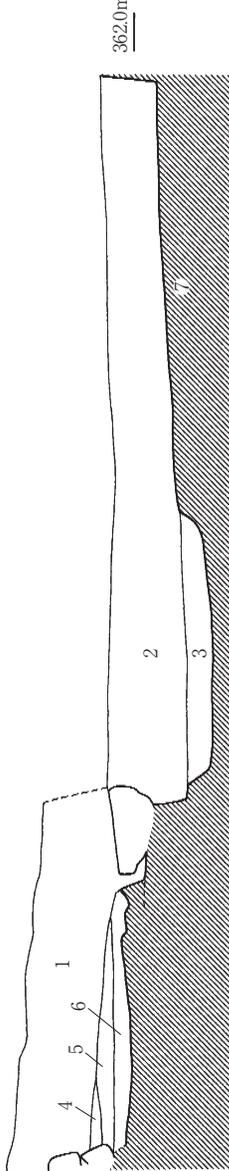
墳丘南側に位置する調査区で、石室から見て左前方から正面、石室開口部を外側から見て右手にあたる部分である。1999（平成11）年度にはG区に1トレンチが設定された。周辺が畑地として利用されていたため、両調査区の間には高さ1m弱の石垣が存在している。

調査の結果、調査区内のほとんどの部分で耕作などによる攪乱が地山面まで及んでおり、古墳築造時の姿は大きく改変されていたが、調査区中央では周堀や張り出し部～前庭部を、墳丘寄りでは3重の石列をそれぞれ検出した。

- Bセクション**
- 1、暗褐色土層 φ～1cmの礫を少量含む（耕作土層）
 - 2、黒褐色土層 φ～8cmの礫を少量含む（周堀覆土層）
 - 3、黒褐色土層 φ～5cmの礫を少量含む（周堀覆土層）
 - 4、黒褐色土層 φ～5cmの礫を微量含む（周堀覆土層）
 - 5、黒褐色土層 φ～2cmの礫を少量含む（周堀覆土層）
 - 6、暗褐色土層 φ～20cmの礫を含む（周堀覆土層）
 - 7、暗黄褐色土層 φ～20cmの礫を非常に多く含む（周堀覆土層）
 - 8、黄褐色土層 φ～15cm程度の礫を含む（地山層）



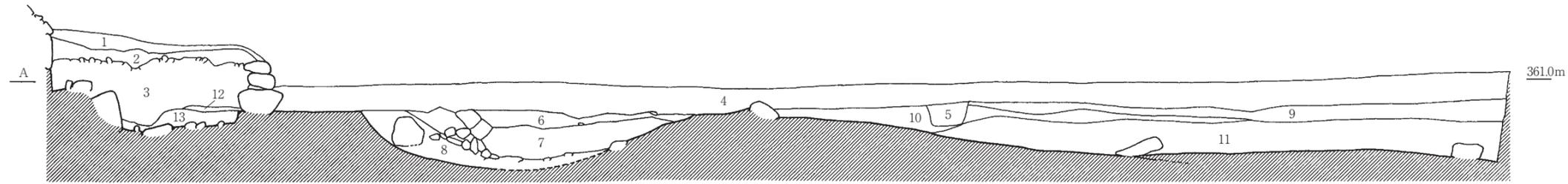
- Cセクション**
- 1、石ガラ層 後世の石垣構築に伴う礫主体層（石垣の裏込め礫層）
 - 2、暗褐色土層 拳程度の礫を含む（耕作土層）
 - 3、黒褐色土層 拳大～人頭大程度の礫を多く含む（周堀覆土層）
 - 4、暗褐色土層 明黄褐色土・アロックスを含む（墳丘盛土層）
 - 5、黒褐色土層（旧表土層）
 - 6、茶褐色土層（地山層）
 - 7、黄褐色土層（地山層）



- Dセクション**
- 1、暗褐色土層（表土層）
 - 2、石ガラ層 後世の石垣構築に伴う礫主体層（石垣の裏込め礫層）
 - 3、暗褐色土層（耕作土層）
 - 4、暗茶褐色土層 焼土粒・炭化粒を多く含む（住居址覆土層）
 - 5、暗茶褐色土層 炭化物を含む（住居址覆土層）
 - 6、暗褐色土層 炭化物を含む（住居址覆土層）
 - 7、暗褐色土層 炭化物を含む（周堀覆土層）
 - 8、暗黒褐色土層（周堀覆土層）
 - 9、暗茶褐色土層（周堀覆土層）
 - 10、暗黄褐色土層（周堀覆土層）
 - 11、暗褐色土層 拳大の礫を多く含む（墳丘盛土層）
 - 12、黄褐色土層（地山層）

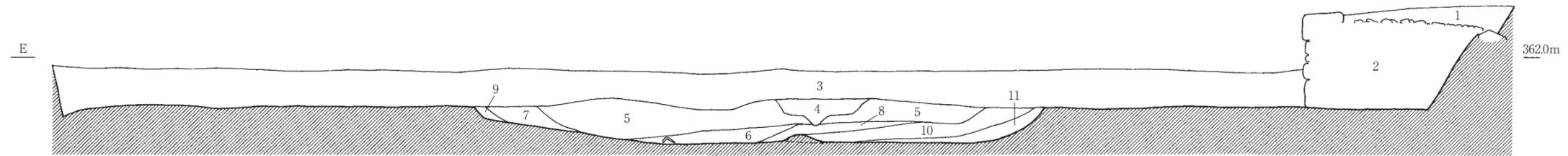
0 (1/60) 2m

図22 244号墳トレンチ個別図① (1/60)



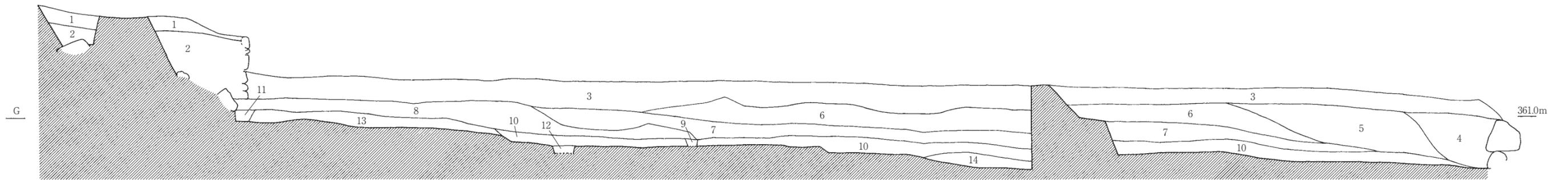
Aセクション

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1、暗茶褐色土層 φ1cm程度の小石を含む(表土層) | 8、暗黄褐色土層 φ~20cmの礫を多く含む。墳丘側は礫層(周堀覆土層) |
| 2、暗褐色土層 φ3cm程度の小石を含む(畑の造成土層) | 9、暗褐色砂層(河川堆積による砂層) |
| 3、石ガラ層(畑の石垣の裏込め礫層) | 10、黒褐色土層(河川堆積による砂泥層) |
| 4、暗褐色土層 φ3cm程度の小石を含む(表土層) | 11、礫層 下層は巨石を含む(土石流による堆積礫層) |
| 5、暗褐色土層(畑造成以前の遺構覆土) | 12、黒褐色土層 明黄褐色土をマール状に含む(墳丘盛土層?) |
| 6、黒褐色土層 φ~10cm程度の礫を含む。墳丘側は礫層(周堀覆土層) | 13、明黄褐色土層(地山層) |
| 7、黒褐色土層 φ~5cm程度の礫を多く含む。墳丘側は礫層(周堀覆土層) | |



Eセクション

- | | |
|--------------------------------|------------------|
| 1、暗褐色土層 拳大の礫を含む(表土層) | 7、黒褐色土層(周堀覆土層) |
| 2、石ガラ層 拳大~φ20cmの礫層(畑の石垣の裏込め礫層) | 8、暗褐色土層(周堀覆土層) |
| 3、暗褐色土層(耕作土層) | 9、黒褐色土層(周堀覆土層) |
| 4、暗褐色砂質土層(畑造成前の掘り込み覆土層) | 10、黒褐色土層(周溝覆土層) |
| 5、暗褐色土層(周堀覆土層) | 11、暗茶褐色土層(周堀覆土層) |
| 6、暗褐色土層(周堀覆土層) | 12、暗黄褐色土層(地山層) |



Gセクション

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1、暗褐色土層 拳大の礫を含む(耕作土層) | 8、暗褐色土層 拳大~人頭大の崩落石を多く含む(崩落土層) |
| 2、石ガラ層(畑の石垣の裏込め礫層) | 9、暗褐色土層(掘り込み覆土層) |
| 3、暗褐色土層 φ~1cmの礫を多く含む(耕作土層) | 10、黒褐色土層 拳大の礫を含む(周堀覆土層) |
| 4、暗黄褐色土層 φ15~30cmの礫を多く含む(畑の石垣の裏込め層) | 11、暗褐色土層 黄褐色地山ブロックを含む(掘り込み覆土層) |
| 5、暗茶褐色土層 拳大の礫を含む(畑の造成土層) | 12、暗褐色土層(掘り込み覆土層) |
| 6、黄褐色土層(畑の造成土層) | 13、黒褐色土層(旧表土層) |
| 7、淡茶褐色土層(畑の造成土層) | 14、淡黄褐色土層 φ3~5cmの礫を含む(地山層) |



図23 244号墳トレンチ個別図② (1/60)

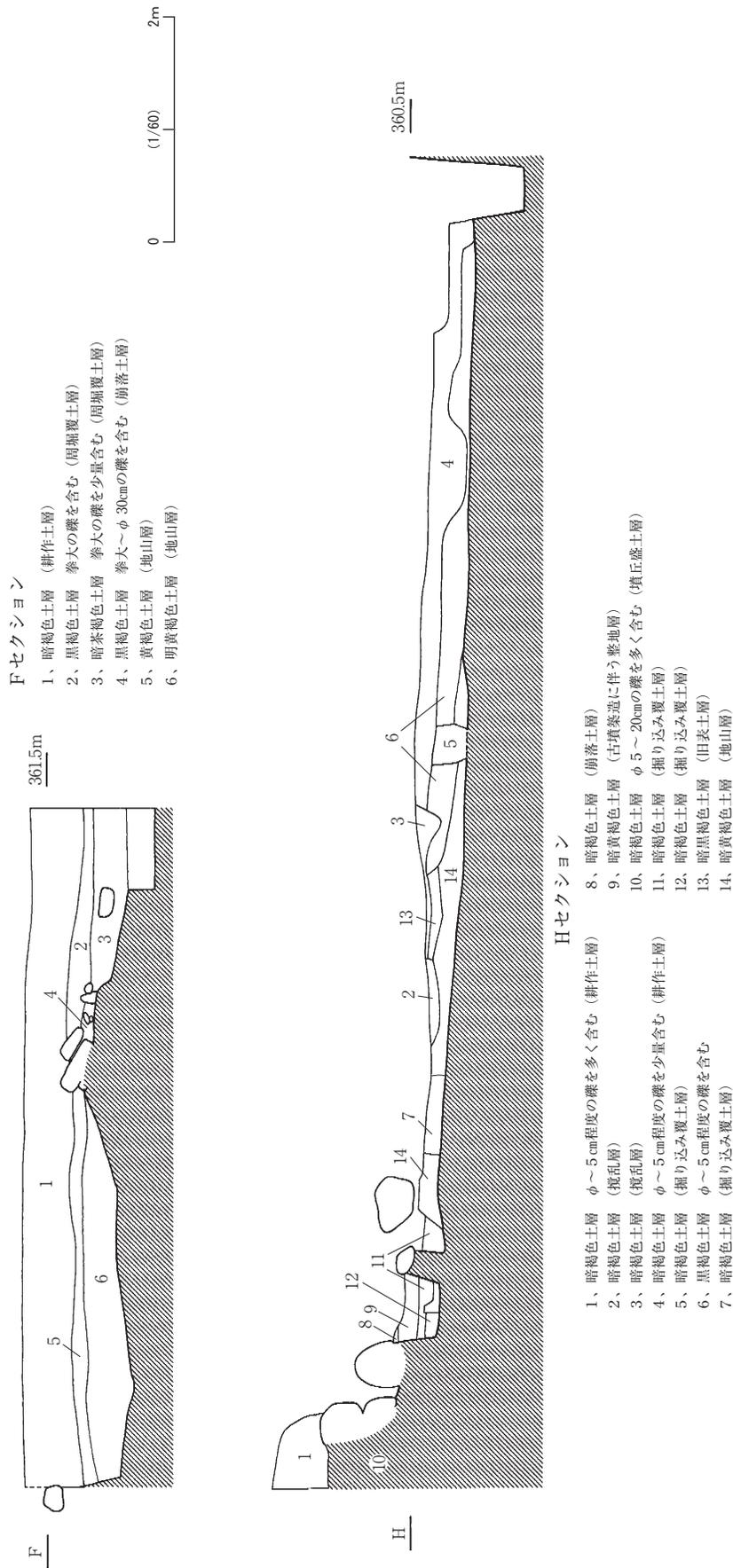


図 24 244 号墳トレンチ個別図③ (1/60)

周堀はF区に隣接するG区東側で一部分が確認できた。墳丘寄りの北側がもっとも深く、調査区中央付近で浅くなって南西側に開放する状態で収束していた。これは削平面が南西側に傾斜しているためである。後述するc石列東端から南側には旧表土層が残存しており、この付近において張り出し部も収束していたことが予想される。この張り出し部付近から石室前面にかけての広がりを前庭部と仮称するが、遺構と遺物の保護の観点から十字にサブトレンチを設定して掘り下げを行うに留め、調査区全体では床面を検出していない。

石列は両調査区にわたって検出された。ここでは外側から内側に向かってa~c石列と仮称する。a石列は石室の真正面に当たるI区から始まり、石室主軸の東約3.5mのG区で途切れる長さ4.8mの石列である。比較的小型の石材を主に用いた脆弱な構造であるが、基本的には古墳の外周を囲むようである。西端は石垣構築の際に抜き取られたものと考えられるが、石列設置面である旧表土層の掘り込みが東端の石材の際で終了していることから、設置当初からこの範囲のみに敷設されていたものと思われる。b石列は石室の真正面に当たるI区から始まり、石室主軸の東約5.7mのG区で途切れる長さ7.7mの石列である。両端は後世の石垣構築の際に抜き取られたものと考えられ、本来の構

築範囲は不明である。主にブロック状の転石を用いて構築されており、1～2段分が残存していた。石室前面では石列が途切れているが、この部分には固く締まった盛土が施されており、構築当初よりこの部分には石材が敷設されていなかったものと思われる。c石列は石室の真正面にあたるI区から始まり、石室主軸の東約6mのG区で途切れる長さ6.7mの石列である。両端は後世の石垣構築の際に抜き取られたものと考えられ、本来の構築範囲は不明である。転石と小型の割石を2～3段程度積み上げ、下部には比較的大型の石材を用いている。石室羨道部前端では、最下段に大型の石材を一段配し、この上に小型の割石を積んでいる。石室左右壁体はこの石列に達して終了しており、石列と上段丘との間には礫が充填されていた。なお、石列前面に堆積した崩落土層への掘り込みから馬具かとみられる金属製品が出土した。石室内に副葬されていたものが掻き出されて混入したものと思われる。

なお、古墳に直接ともなわない別時期の遺構も検出された。G区南側では掘立柱建物跡(SB01)を検出したほか、H区中央付近では弥生時代後期の住居跡(SI04)が存在することを確認した。掘立柱建物は2間×2間の総柱建物で、柱間は心々で約1.6mであった。

I・J区

墳丘南西側に位置する調査区で、石室から見て正面から右前方、石室開口部を外側から見て左手にあたる部分である。I区東側は後世の石垣が構築されており、H区との比高差はI区側が1m以上低くなっている。また、調査区西側には現林道が敷設されている。J区には調査前から大型の石材が墳丘裾廻りに確認できた。

調査の結果、道路寄りでは地山上面まで耕作による攪乱が及んで古墳築造当初の姿は大きく改変されていたが、下段丘に断ち割りを入れた部分においては上段丘石垣状石積み、下段丘土留め石積み、下段丘盛り土石が確認された。

上段丘石垣状石積みは調査前から露出していたが、掘り下げによりその下部構造を確認することができた。石積みは、旧表土含む地山層の上に若干の盛土整地を行い、この上に小型の割石を数石はさんだ上に比較的大型の石材を基礎石として設置していることが判明した。石積みの下部は下段丘盛土石によって埋め込まれていたが、J区では上段丘石垣状石積みと下段丘盛土石の間に埋め込まれた下段丘土留め石積みを検出している。この石積みは上段丘石垣状石積みと同じ面から構築を始めており、傾斜は上段丘石垣状石積みに比べてやや急である。基本的に小型の割石を長手に積み上げて構築されている。

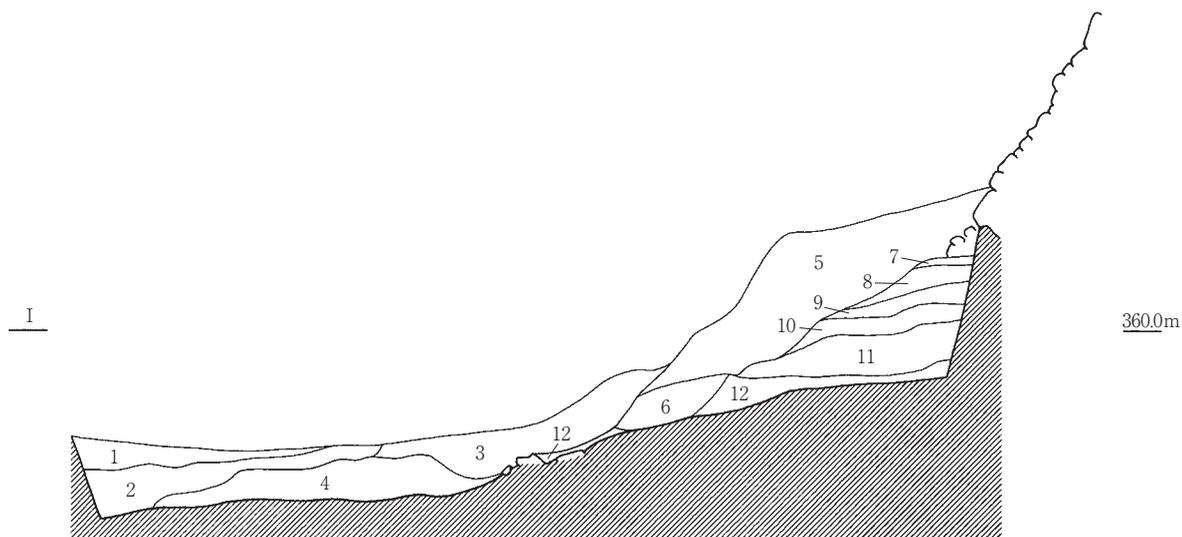
J区において調査開始以前から地表面に露出していた大型の石材は、地山から若干遊離した状態であったため厳密には原位置を保っていないことが確認されたが、概ね墳丘裾部分を示しているものと思われる。後述するM・N区で確認された下段丘石垣状石積みに連続していた可能性が高い。

K・L区

墳丘西側に位置する調査区で、石室から見て右前方～右側面にあたる部分である。1998(平成10)年度にはL区に2トレンチが設定された。調査区西側には現林道が敷設されている。K区では調査前から裾部分に大型の石材が露出していることが確認できた。

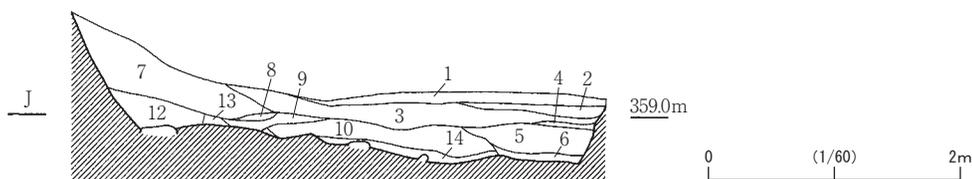
調査の結果、道路寄りでは地山上面まで耕作による攪乱が及んで古墳築造当初の姿は大きく改変されていたが、下段丘に断ち割りを入れたL区においては上段丘石垣状石積み、下段丘中段石列、下段丘土留め石積み、盛土石、下段丘石垣状石積みを確認した。

下段丘土留め石積みは小型の割石、転石をやや乱雑に積み上げており、J区で検出された同様の石積みと比較すると脆弱な構造である。下部構造については根石までは掘り下げを行っていないため不明である。下段丘土留め石積みの外側には盛土が施されていた。石積みの裏側は調査を行っていないが、崩落した部分を観察する限



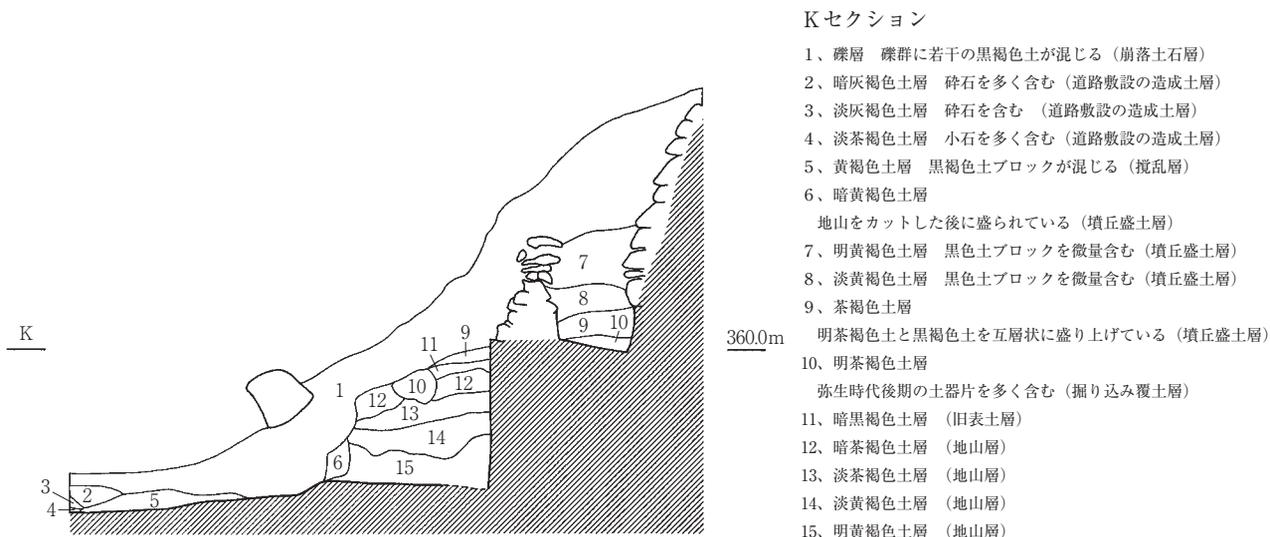
I セクション

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| 1、暗灰褐色土層 碎石を多く含む（道路敷設の造成土層） | 7、淡茶褐色土層（墳丘盛土層） |
| 2、淡黄褐色土層 拳大程度の礫を多く含む（道路敷設の造成土層） | 8、茶褐色土層 明茶褐色土と黒褐色土を互層状に盛り上げている（墳丘盛土層） |
| 3、暗茶褐色土層 拳大～人頭程度の礫を多く含む（攪乱層） | 9、暗黒褐色土層（旧表土層） |
| 4、黄褐色土層 黒褐色土ブロックが混じる（攪乱層） | 10、淡茶褐色土層（地山層） |
| 5、礫層 礫群に若干の黒褐色土が混じる（崩落土石層） | 11、淡黄褐色土層（地山層） |
| 6、暗茶褐色土層 拳大の礫を含む（攪乱層） | 12、明黄褐色土層（地山層） |



J セクション

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1、暗褐色土層（表土層） | 8、暗黄褐色土層 黄褐色土ブロックを多く含む（攪乱層） |
| 2、暗灰褐色土層 碎石を多く含む（道路敷設の造成土層） | 9、暗黄褐色土層（攪乱層） |
| 3、暗黄褐色土層（耕作土層） | 10、暗黄褐色土層（攪乱層） |
| 4、暗褐色土層（耕作土層） | 11、暗褐色土層（造成土層） |
| 5、暗褐色土層 拳大程度の礫を含む（道路敷設の造成土層） | 12、暗褐色土層 黄褐色土ブロックを多く含む（墳丘石材抜き取り痕） |
| 6、暗黄褐色土層 拳大程度の礫を含む（道路敷設の造成土層） | 13、暗黄褐色土層（地山層） |
| 7、暗褐色土層 拳大～人頭程度の礫を多く含む（崩落土層） | 14、黄褐色土層（地山層） |



K セクション

- | |
|--|
| 1、礫層 礫群に若干の黒褐色土が混じる（崩落土石層） |
| 2、暗灰褐色土層 碎石を多く含む（道路敷設の造成土層） |
| 3、淡灰褐色土層 碎石を含む（道路敷設の造成土層） |
| 4、淡茶褐色土層 小石を多く含む（道路敷設の造成土層） |
| 5、黄褐色土層 黒褐色土ブロックが混じる（攪乱層） |
| 6、暗黄褐色土層 地山をカットした後に盛られている（墳丘盛土層） |
| 7、明黄褐色土層 黒色土ブロックを微量含む（墳丘盛土層） |
| 8、淡黄褐色土層 黒色土ブロックを微量含む（墳丘盛土層） |
| 9、茶褐色土層 明茶褐色土と黒褐色土を互層状に盛り上げている（墳丘盛土層） |
| 10、明茶褐色土層 弥生時代後期の土器片を多く含む（掘り込み覆土層） |
| 11、暗黒褐色土層（旧表土層） |
| 12、暗茶褐色土層（地山層） |
| 13、淡茶褐色土層（地山層） |
| 14、淡黄褐色土層（地山層） |
| 15、明黄褐色土層（地山層） |

図 25 244 号墳トレンチ個別図④ (1/60)

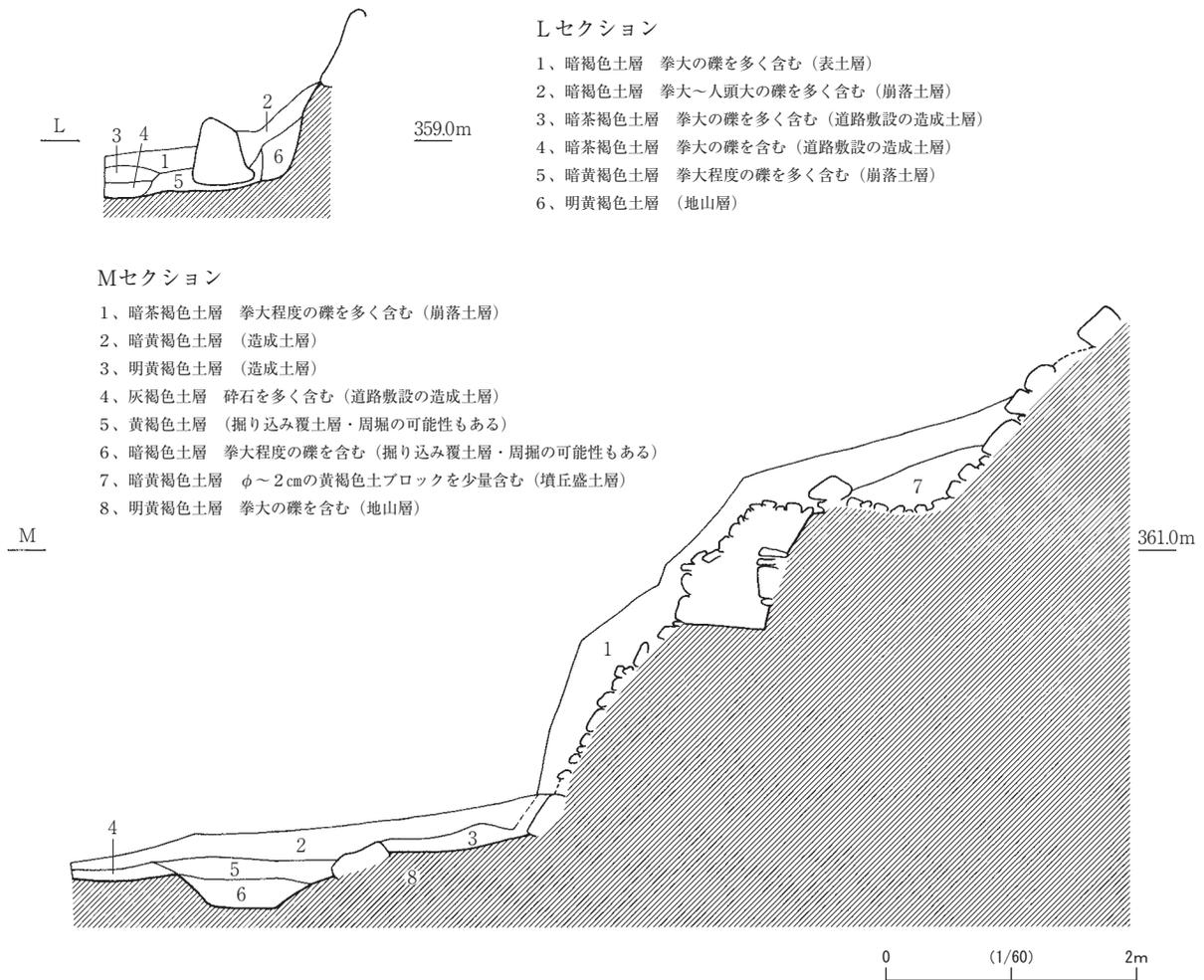


図 26 244号墳トレンチ個別図⑤ (1/60)

り、土砂を充填している可能性がある。この土砂の上には礫層が約0.3mほどあり、この上から下段丘中段石列が上段丘石垣状石積みを囲むように検出された。築造時には更に広い範囲に連続していたものと思われる、下段丘土留め石積みと同様に下段丘盛土石を留めるための埋め込み施設であると考えられる。

K区において調査前より地表面に露出していた大型の石材は、地山から若干遊離した状態であったため厳密には原位置を保っていないことが確認されたが、概ね墳丘裾部分を示しているものと思われる。おそらく下段丘石垣状石積みに関連するものであろう。

L区の墳丘裾付近からは、直線的に北側へ伸びてM区で検出された石列に連続する1～2段積みの石列が検出された。削平面に設置されている石垣で内部には若干の裏込め石が充填されている。墳丘裾部分に設置されていることから、墳丘にともなう遺構である可能性が考えられたが、石材の並びが直線的であること、場所によっては設置面のレベルが裾石より1m近く低いことなどから墳丘にはともなわない石垣と判断した。

M・N区

墳丘北側に位置する調査区で、石室から見て右側面～右後方にあたる部分である。M区西側は現林道が敷設されており、またM区からN区の北側には東に隣接するO・P区まで続く後世に構築された石垣が存在している。M区においては調査前から墳丘裾付近に大型の石材が若干露出していた。

調査の結果、調査区の西側から北側にかけては攪乱が地山上面まで及んでおり、古墳築造当時の姿が改変されていたが、墳丘側では崩落土石を除去した段階で上段丘石垣状石積み、下段丘土留め石積み、下段丘石垣状石積

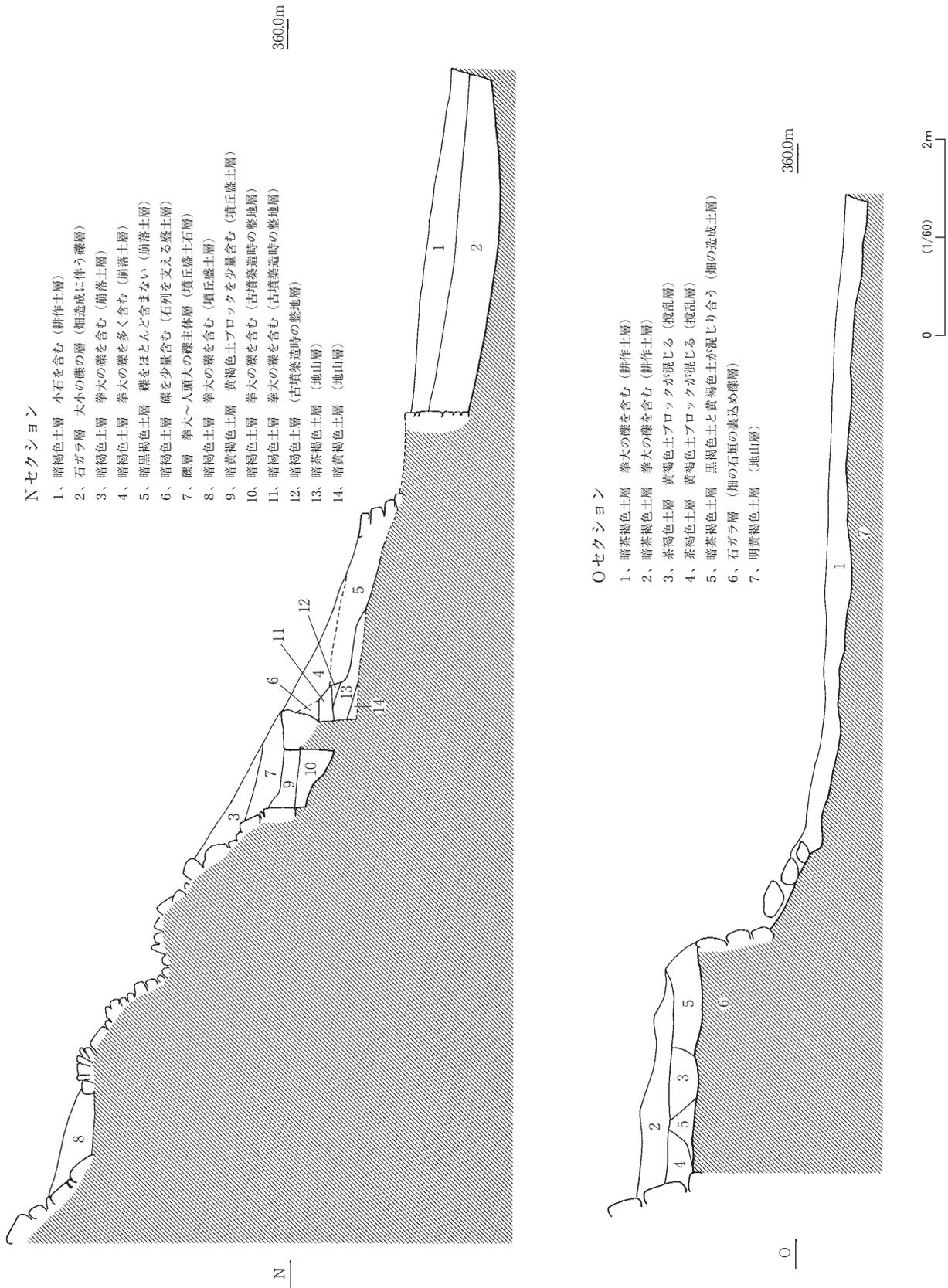


図 27 244号墳トレンチ個別図⑥ (1/60)

み、下段丘中段石列、裾部外周列石が確認できた。

下段丘土留め石積みはL区中段石列の乗っているテラス面上に構築された石積みで、小型の割石を面をそろえて積んでいる。N区側では崩壊した状況であった。傾斜は緩やかで上段丘石垣状石積みに取り付いていた可能性がある。下段丘石垣状石積みは、調査前からM区墳丘裾に一部が露出していた大型石材に連続して検出された。上段丘石垣状石積みで用いられている石材よりも若干大型の石材を用いており、M区では1～2段、N区では3～4段程度が残存している。土層断面から、若干の削平整地（Nセクション10～12層）はあったものと思われるが概ね地山層（旧表土層）の上面に根石を据えて構築を開始している。最下段にはやや大型の石材を用いているが、上部は割石を面をそろえて使用している。構造・技術的には上段丘石垣状石積み類似している。裾部外周列石は下段丘石垣状石積みの外側約0.7 mの位置で検出された。石材を長手に用いて敷設した石列で、一段のみ確認できた。築造当初より一段積みであった否かは不明である。現在のところ他の調査区からは検出されていないが、石室開口部にあたるH区で確認されている石列のいずれかに対応する可能性もある。

古墳にともなわない遺構として、M区において下段丘石垣状石積みの下方から弥生時代住居跡（SI03）の炉を検出した。

○・P区

墳丘北側に位置する調査区で、石室から見て右後方から裏側にあたる部分である。1998（平成10）年度にはO区に3トレンチ、P区に8トレンチが設定された。調査区の中央からやや墳丘寄りにはM・N区より石垣が続いており、また両調査区間にも畑の造成にともなう約1 mの石垣が存在する。

調査の結果、調査区北西側は攪乱が地山面まで及んでおり、古墳築造当初の地形が改変されていたが、O区墳丘側では上段丘石垣状石積み、下段丘盛土石を、P区東側では周堀をそれぞれ確認した。

下段丘盛土石はかなり崩落していたが、これは先述した石垣の構築にともなって削られたことによるものと思われる。周堀は東に隣接するA区に連続するもので、覆土中からは多くの礫が墳丘側斜面を覆うように検出された。これらの礫は検出状況から244号墳の墳丘から崩落してきた盛土石であると考えられる。

上記の調査結果から、山側の墳丘外周には周堀が巡らされていたこと、石室前面に張り出し部・前庭部らしき空間が形成されていたこと、下段丘が上段丘と同様の石垣状石積みによって覆われていたこと、上段丘は若干の整地をともないながら概ね地山上に構築されており、下段丘はその外側を覆うように構築されていることなどが確認された。しかしながら、墳丘の周辺地形は大きく削平・改変されているため、山側の周堀と谷側の下段丘がそれぞれの反対側において存在したのかなど、明らかにできなかった課題も多く残された。墳丘規模についてもほぼ全周が遺存している上段丘が直径16 m内外を測ること以外は不明な部分が多いが、下段丘が全周していたと仮定すれば墳頂部からN区で検出した裾石までの距離を半径として約21 mと復元される。

写真図版



31号墳全景（南から）



31号墳1 トレンチ（北西から）



31号墳2 トレンチ (北東から)



32号墳全景 (南西から)



32号墳1 トレンチ (西から)



32号墳2 トレンチ (東から)



33号墳全景（南東から）



33号墳1 トレンチ（東から）



33号墳2 トレンチ (北から)



243号墳全景 (南西から)



243号墳A区（北東から）



243号墳C区（南から）



243号墳C区（南東から）



243号墳D区（南から）



243号墳E区（南西から）



243号墳F区（西から）



243号墳G区（北西から）



243号墳H区（北から）



244号墳全景（北西から）



244号墳A区（南西から）



244号墳B区（南西から）



244号墳C区（西から）



244号墳D区（西から）



244号墳E区（北西から）



244号墳F区（北から）



244号墳G区（北から）



244号墳H区（北東から）



244号墳I区（北東から）



244号墳J区（東から）



244号墳K区（東から）



244号墳L区（南東から）



244号墳M区・N区（南東から）



244号墳O区・P区（南から）



244号墳区石室前面（南西から）

報告書抄録

| ふりがな | くにしせき おおむろこふんぐん | | | | | | | |
|--------------------|--|----------------|---|--|---|---|------------|--|
| 書名 | 国史跡 大室古墳群 | | | | | | | |
| 副書名 | 史跡整備事業にともなう遺構確認調査概要報告書(2) | | | | | | | |
| | — エントランスゾーンA・E区 遺構編 — | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 飯島哲也・清水竜太 | | | | | | | |
| 編集機関 | 長野市教育委員会 文化財課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒380-8512 長野県長野市鶴賀緑町1613番地 TEL 026-224-7013 FAX 026-224-5104 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2008(平成20)年3月31日 | | | | | | | |
| 印刷所 | 鬼灯書籍株式会社(〒381-0012 長野市柳原2133-5 TEL 026-244-0235) | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 経緯度 (旧測地系) | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| おおむろこふんぐん 大室古墳群 | ながのけんながのしまつしろまち 長野県長野市松代町 おおむろ254ばんち3ほか 大室254番地3他 | 20201 | F-114 | 北緯 36° 35' 26" 東経138° 13' 45" | 19980707) 20071201 | 3,315㎡ | 史跡整備 事業 | |
| | | | | 平面直角座標系 (第Ⅷ系) | | | | |
| | | | | X = 65547.0m Y = -24225.0m | | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 大室古墳群 | 古墳 | 古墳時代 中期～終末期 | 26号墳 27号墳 28号墳 29号墳 31号墳 32号墳 33号墳 235号墳 237号墳 238号墳 239号墳 240号墳 | 241号墳 242号墳 243号墳 244号墳 245号墳 246号墳 247号墳 A号墳 B号墳 C号墳 D号墳 ハ号墳 | 土師器、 須恵器、 埴輪、 鉄鏃、 耳環、 獣脚形土製品、 寛永通宝、 人骨片、 など | 各古墳の墳端や 墳丘構造など、範囲 確認についての諸 情報が得られた。 26号墳の周辺で 新たにC・D号墳の 2基を確認し、また 28・237・247号墳 は古墳ではないこ とが判明した。 | | |
| 要約 | 大室古墳群は、長野県長野市松代町大室に所在する、5世紀前半から8世紀にかけて築造された総数約500基の大規模な古墳群であり、1997(平成9)年にその一部である大室谷支群が国史跡に指定された。史跡指定範囲のうちエントランスゾーンに位置する24基の古墳について、史跡整備事業にともなう遺構確認調査を1998～2006(平成10～18)年度に実施した。調査は、現況測量などの予備調査、各古墳の墳端確認のための試掘調査、構造確認などの発掘調査に区分し、それぞれ貴重な諸情報を収集することができた。この調査成果をもとに、2011(平成23)年度までの予定で史跡整備事業を進めていく予定である。 | | | | | | | |

国史跡 大室古墳群

史跡整備事業にともなう遺構確認調査概要報告書(2)

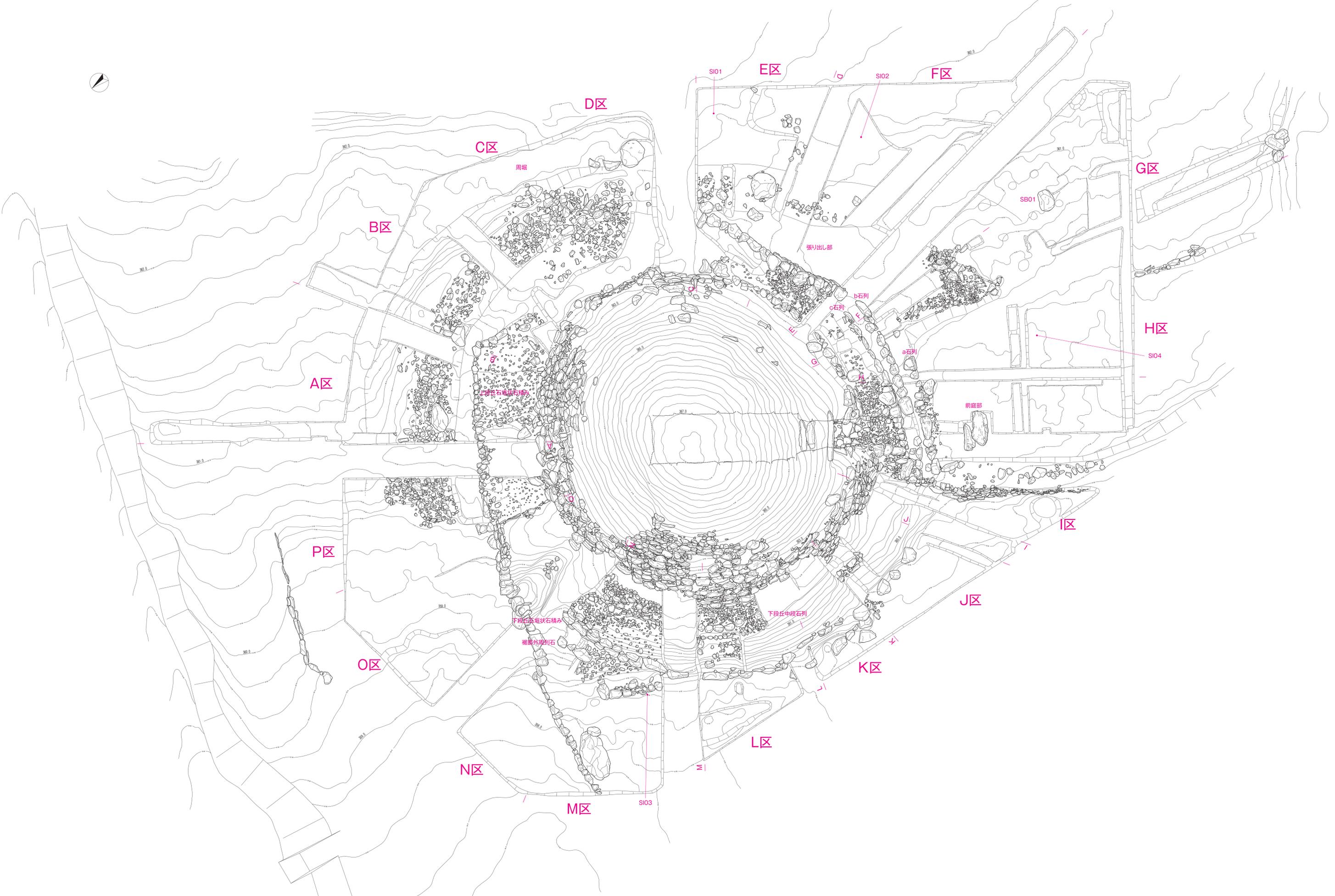
— エントランスゾーン A・E区 遺構編 —

2008 (平成20) 年 3 月 28 日 印 刷

2008 (平成20) 年 3 月 31 日 発 行

発 行 編集 長野市教育委員会文化財課

印 刷 鬼灯書籍株式会社



244号墳調査成果図(1/60)

